都名所圖會

前朱雀

再刻

5

都名所圖會巻之五目録

前朱雀

欣浄寺
瑞光寺
石峯寺 茶碗子
栗栖小野
少将通路
一言寺
長明方丈石
京橋舩場
櫃川橋
三室戸寺
茶摘圖
宇治橋
朝日山

深艸 鶉床
元政墓
即成就院
小野
下醍醐
笠取山
石田
豊後橋
小幡
宇治山
宇治川
通圓茶屋
恵心院

藤森社
昭宣公墳
那須与一墳
小町水
上醍醐
日野薬師堂
佛國寺
指月
弥陀次郎旧跡
喜撰嶽
山吹瀬
橋寺
興聖寺

走馬圖
宝塔寺
桓武帝陵
橋の本
醍醐水
重衡塚
六地蔵
御香宮 御香水
黄檗山万福寺
宇治十帖古跡
橘小嶋崎
離宮神
琴坂

亀石
槙の嶋
槇尾山
鎧掛松
鮎汲圖
鷲峯山金胎寺
兜社
玉川
蟹満寺
一休和尚旧跡
狛里
鶯森
加茂社

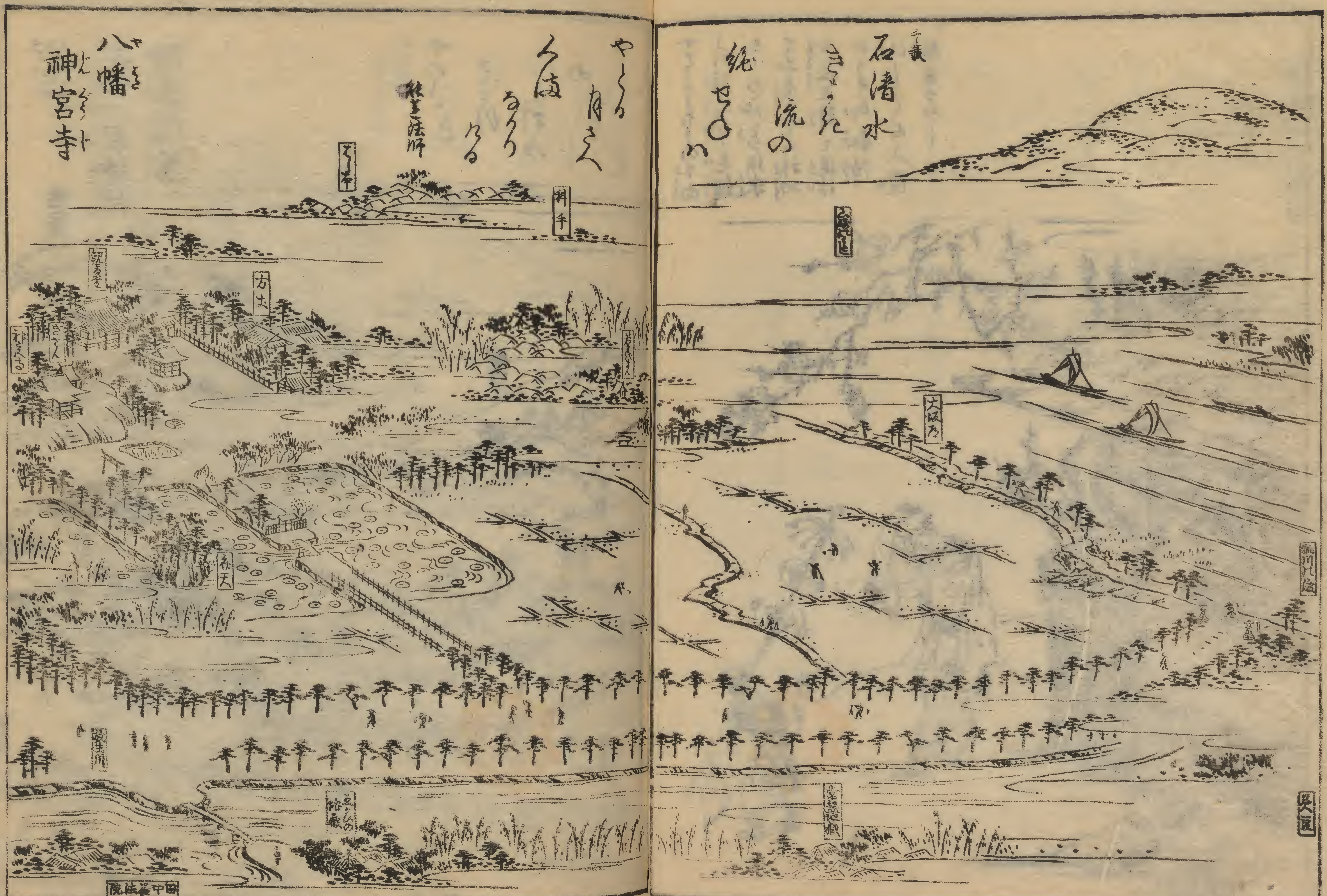
山吹
橋姫社
平等院
扇芝
宇治田原
百丈山大智寺
玉水
井手里
涌杜
天神杜
瓶原
海住山寺
清見河原

中宿芝
浮舟嶋
鳳凰堂
駒磨松
黄栗焼栗林
久世鷺坂
諸兄公旧跡
光明山
北吉野神童寺
綴喜郡
椋杜
恭仁都
笠置寺

螢谷
鵜飼瀬
鵜殿
縣社
信西入道墓
椎尾山
玉井寺
高倉宮霊廟
薪酬恩菴
木津川
國分寺
流岡
後醍醐帝皇居

栗栖天満宮


やそことまりの下向より破魔弓毛鑓などの武器を求て土産とすれハ神功皇后三韓を退治ありて御凱陣有しかへ遺風なるべし


八幡神宮寺
千載
石清水きよき流の絶せねハ
やとる月さへくまなかりける
俊恵法師
科手


八幡御旅所疫神社阿弥陀堂
新後撰
やはた山さかりの神のめくみとそ
千代ともさし峯の松のえ
摂政太政大臣
鳩の峯
太子堂
七曲
高良社
不動堂
庚申堂
極楽寺
放生川

石清水八幡宮



石清水正八幡宮は王城の南にして行程四里綴喜郡男山鳩嶺に御鎮座あり

新續古今

やはた山音にきこえし初しほの田に松萬代と松風ぞ吹く　後鳥羽院

續後撰

るかてゝ世よりにかはらぬ男山あふく峯よりうつる月影　後久我太政大臣

本社は三坐にして譽田天皇 日本紀に足仲彦天皇又應神天皇と申す仲哀天皇第四の御子にして御母は神功皇后也御在位四十一年聖壽一百十一歳

東の間に鎮坐し給ふ

鵜鷀草葺不合尊の妃　神功皇后　西の間に鎮坐し給ふ

玉依姫にして神武天皇の御母なり

開化天皇の曾孫氣長宿禰の女なり幼より聡明睿智貌容端麗なり當帝九年に

三韓を平て筑紫にありて應神帝を生給ふ在位六十九年聖壽一百歳

當山に御鎮坐は貞觀二年六月十五日和州大安寺の沙門行教和尚神

殿を造營しける行教は筑紫宇佐八幡宮に一夏九旬の間參籠して

晝は大乗の經を讀夜は真言を誦して法樂せしに八幡宮御託宣あり

我王城の近に遷坐して鳳闕を守護し國家を安泰ならしめんとのたまひ又

夜行教の三衣に阿弥陀の三尊現じ給ふ沙門都に上って此由を奏聞し

ければ朝廷大に悦せ給ひ遂に此山に神殿を營て永く崇敬し給ふ

八幡の神號は筑紫宇佐驗の松の下に八流の幡降る赤幡四流白幡四流則此所に

社を建て正八幡大菩薩と崇奉る又一説には和氣清麿に託して譽田八幡丸

とを名づけ給ふとあり當社は行教の勧請より兩部にして出家の者わくけ社僧の座と

はじめ給ひしかれど今幣使の御しるしたは唯一の神道にて社僧が行ありたる

ところ一鳥居 松下宮院まあり八幡宮の額は佐理卿の筆なり旧損じしかれぞ

松花堂まうけ是を補ふ

二鳥井 七曲の蘂にあり　三鳥居 大師堂の前にあり石柱に銘を彫正保二年正月従四位

下行信濃守大江姓永井氏尚政これを建るとあり

若宮 仁徳天皇を祭る　若姫宮 宇禮姫を祀　水若宮 宇治の皇子を祭る

姫を祭る　仁徳帝の御子なり

上高良 武内大臣を祭る六朝の臣下に　下高良 藤大臣連保を祭る神號を高良

して壽三百十餘歳　玉垂命といふ干満の兩顆をのそく

奉行しの人故に　石清水 本殿の巽の方の半腹にあり

玉垂と号すとしるす　攝社に石清水權現社あり

續古今

松もおひ又も苔むす石清水ゆくすゑとほくつかへまつらん　貫之

新拾遺

神かけてやはらけも石清水まんちよをせれ末ぞ久しき　為家

橘樹 社殿の前にあり　叙向橘 西の回廊の外にあり　摘 東回廊の外にあり判官正成祈願のため投獻し

橘の傍にあり行教和尚の手植及今此株の残りまり希代の大木なり

安宗別當社 安宗は行教の甥なり　狩尾社 本殿の西六町ばかりにあり天照大神大國玉命を祭る

大塔 大日多宝の二尊を安置　琴塔 毘沙門天を安置軒の四方に　太子堂 此堂あるをもって太子坂といふ

安置す　琴をかけて鹿苑院の代とぞ

像阿弥陀佛を安置す　藥師堂 護國寺といふ當社御鎮座以前の本尊の釼之　阿弥陀堂 いへり南無佛の

安置す　開基は詳ならず本尊は立像の藥師

八幡宮御作の　元三大師堂 大師の御作御の君の作　愛染堂 盛徳院といふ本尊は

阿弥陀を安置す　ちしもは比叡山にあり　愛染明王を安置す

疫盡堂 一鳥居の南廊下の西にあり此所八幡宮御旅所之疫神ハ正月十九日

一日の勅使ハ延喜式に曰山城と摂津の堺に疫神を祭らしむ世人

正月十八日より十九日まで当山の禅衆新して其年の疫難を拂ふなり土器を捧して

将来の札開釘竹破魔弓毛鑓等を求めて家に収めて邪鬼を退るなり

本地堂 疫神堂の西に隣る極楽寺と称す本尊ハ阿弥陀仏脇士ハ観音

勢至を安置す此三尊ハ本殿の御正躰なり堂前の鐵燈籠ハ

豊臣秀頼公の 細橋 八幡住吉の二神影向ありし所なり石を布て橋の形とし

御寄附なり 注連をそなへ傍に伊勢を祭宮遙拝所あり

宮本坊 行教院と号し社家の 瀧本坊 石清水の傍にあり松花堂惺々翁

人にして書画をよくし今其屋に 開山堂 行教和尚の像又昭乗の住房なり文禄慶長の頃の

やうんで泉坊あり 本覚大師の像を安置す真言宗にて弘法大師

僧正徳助建立 景清塚 平家の侍士悪七兵衛景清主君の讐を報んと心坊

しのひ入りて 小鍛冶宗近此所に祈て 将軍頼朝卿当山参詣をねらひしとぞ

稲荷社 名剱を鍛しなり

大乗院 宿院科手の向にあり当山の神宮寺なり本尊ハ千手観音を安置し

聖徳太子 神殿ハ神功皇后をまつり愛染明王を方より安置し開基ハ

なり

足立寺 本殿の西にあり昔称徳天皇弓削道鏡を帝位にのぼせんと

和気清丸を勅使として宇佐八幡宮に祈らしむ清丸ハ神託を請て

清丸上洛して此旨を奏す道鏡怒りて清丸の二つの足をきりて河内か

のせへ流すを此辺宇佐の使者に来り清丸を負ふて社殿に至る

社壇より五色の小蛇出て清丸が膝を舐るに二ッ足もとのごとく生出て清丸

帰洛の後此山に仏殿を建て弥勒仏を安置し足立寺と号す

三善法寺 当田山の社務にして二ヶ寺あり善法寺新善法寺 五濱泉 石清水 赤井 藤井

田中善法寺も同じ 武内大臣の後裔にして祀氏なり

赤井寺も真所

圖にあり

放生會ハ例年八月十五日なり人皇四十四代元正天皇御宇養老四年

九月に征夷の事ありて大隅日向の両国に大に逆乱を故に内裏より筑紫

宇佐八幡宮に御祈誓ありて其宮の禰宜辛嶋勝波豆米ハ神軍を引率し

てかれ国を征し多く賊を亡しなり其後八幡の御託宣に此度の合戦に多く

の殺生せしかバ放生会をなすべしとなり神勅ましく(?)されど諸国に立るかそても

此時より始るなり 扶桑記にいはく後三条院延久二年八月十五日より上卿六府の駄

寮を始くし幸に准じて神輿に扈従しかるより始るなり

放生川 八月十六日放生供養ありて 高橋 又橋を安居橋といふ

新古今 放生亭より魚鳥を放しける

男山 杜のくゝりも契りけん 御せにちかる川よりの鐘 家隆

臨時祭ハ二月中午日なり 天慶五年より始る

石清水つたへしのまつり

新勅 ちりもせし衣にそれさく 竹の大よ人のかざしにさくらん 定家

餌飼地蔵 此野堂の傍に金昌寺の図におらわる 若宮八幡科手にあり 常盤地蔵 八幡の社地之

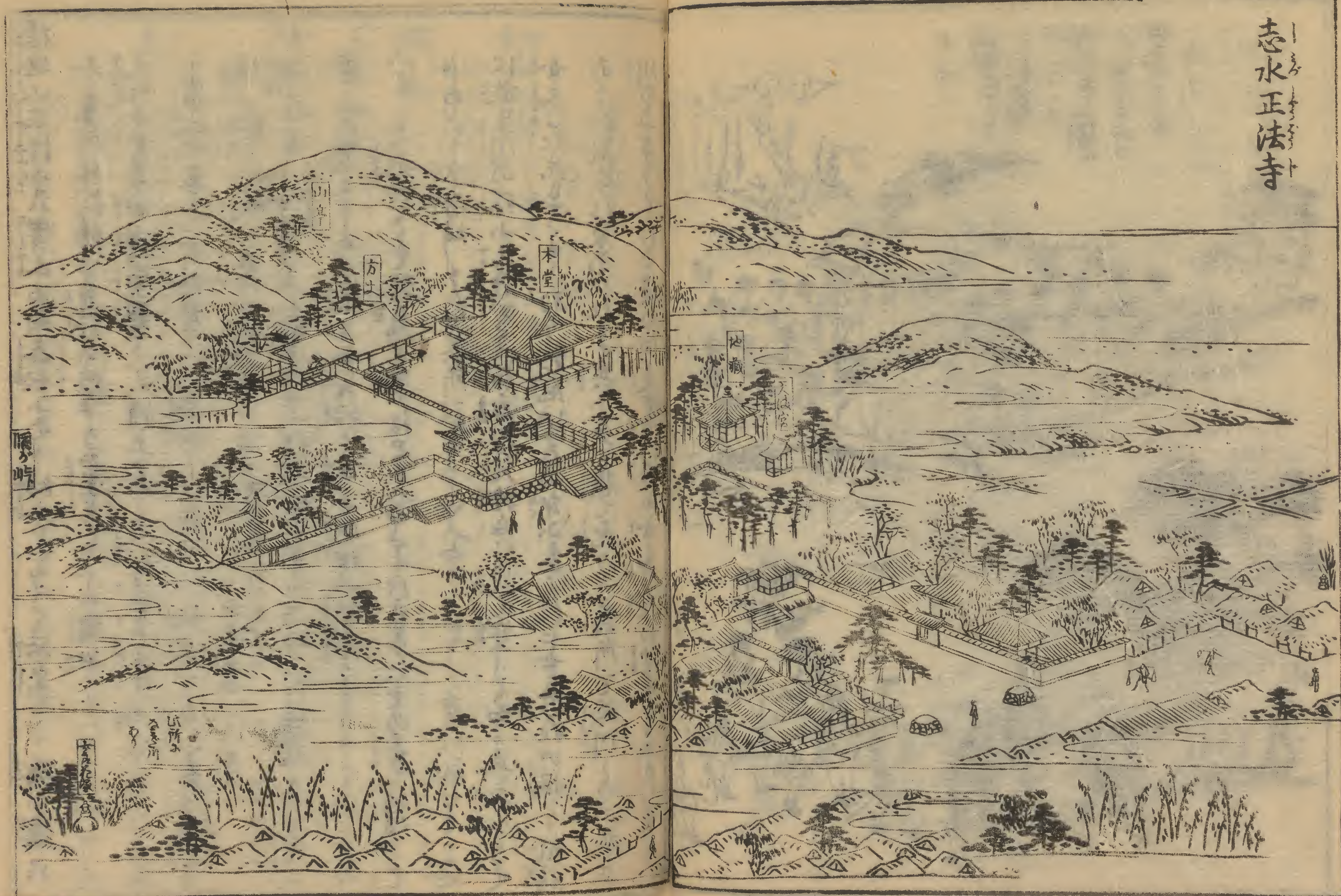
放生川へ餌をあたへける(本あると)

八町にあり

八幡の放生会ハ
毎年八月十五日の
未明より下院へ神
幸ありて同日七ッ時
還幸なり又十五日
ハ放生川の汀へ
社僧出てもろく
の魚鳥を放ち
ことに此両日ハ
遠近より諸人
群集し

宿院のかたハら
ハ芝居放下
併いろくの
物売出て見世も
多く市をなせハ
神慮のめぐみ
をしるべし





志水正法寺
本堂
方丈
地蔵

徳迎山正法寺ハ男山の南志水にあり浄土宗にして洛東百万遍に属す
本尊阿弥陀佛ハ恵心の作なり当寺ハはじめ圓誓上人の草創にして
天台宗なり中興聖誉上人浄土宗と改む後奈良院御宇天文十六年
に当山の第十一世傳誉上人参内して説法し叡感ありて香衣を
賜ハ唐門の額徳迎山と勅額其上勅願寺となる 尾州大納言源義直卿の御母公相應院殿の御菩提所なり

女郎花塚 志水の南八町にあり
人皇五十一代平城天皇の御時小野頼風といふ優人
男山の麓にすめり京より女ひとり来りて連理の契浅からざりしにかの女
ハしばらく為ゆゑて頼風が来ぬをうらみてあやしみけれどもかの女ハほどなく
尋ね来る女房ありまたは其所へ行けるに女ならぬをしく思ひ胸せまりて遂
に放生川の堤に山吹がさねの衣をぬぎ捨身を投て空しくなる其衣くちて
女郎花生出るとかや頼風此花のもとにたちよれば女郎花の根より風情
ありて頼風これを悲しみて共に身を投て死たりし其所を後川より放生
川の上なりしかど漢の何文が女化塚に女郎花の生しも相似たりとぞいへれ
古今の序にも男山のむかしをおもひ出て女郎花の一時をくねるにもうたをいひてぞなぐさめける

古今
女郎花うしとみつゝぞゆきすぐる男山にしたてりとおもへば　布留今道

哀取り餓鬼にもるゝ女郎花　班竹

如法経塚 男山の西にあり桓武帝王城鎮護として経王を収らるゝ所を南岩蔵といふ

心吉橋 志水の南天神の森へ行道にあり又の名を月夜夕立に河水たゝえて清るゆへ此名あり土人の口称なり

美濃山 志水の巽にあり後鳥羽院の愛妃美濃局此所にすめり侍者に侍従といふ人の塚あり

洞ヶ峠 八幡の南半里にあり山城河内の堺也南峠ともいふ

高野街道 志水の南より河内の田口村へ出る道也弘法大師此所より高野山へ参詣し給ふゆへ名とすとぞ

王塚 志水の西の方一里内里村の山にあり継體天皇の陵なりといふ

岩田 やはたの東の方一里余にあり御霊社あり此里の氏神なり万葉九の巻式部卿宇合のおほ山品の石田と詠しは醍醐の南なり又延喜式に久世郡石田の神社とあるは此所なり両所ともに宗祇は作の道指の西といひ順阿は山科を用ゆるなりよりて其所を定めがたし

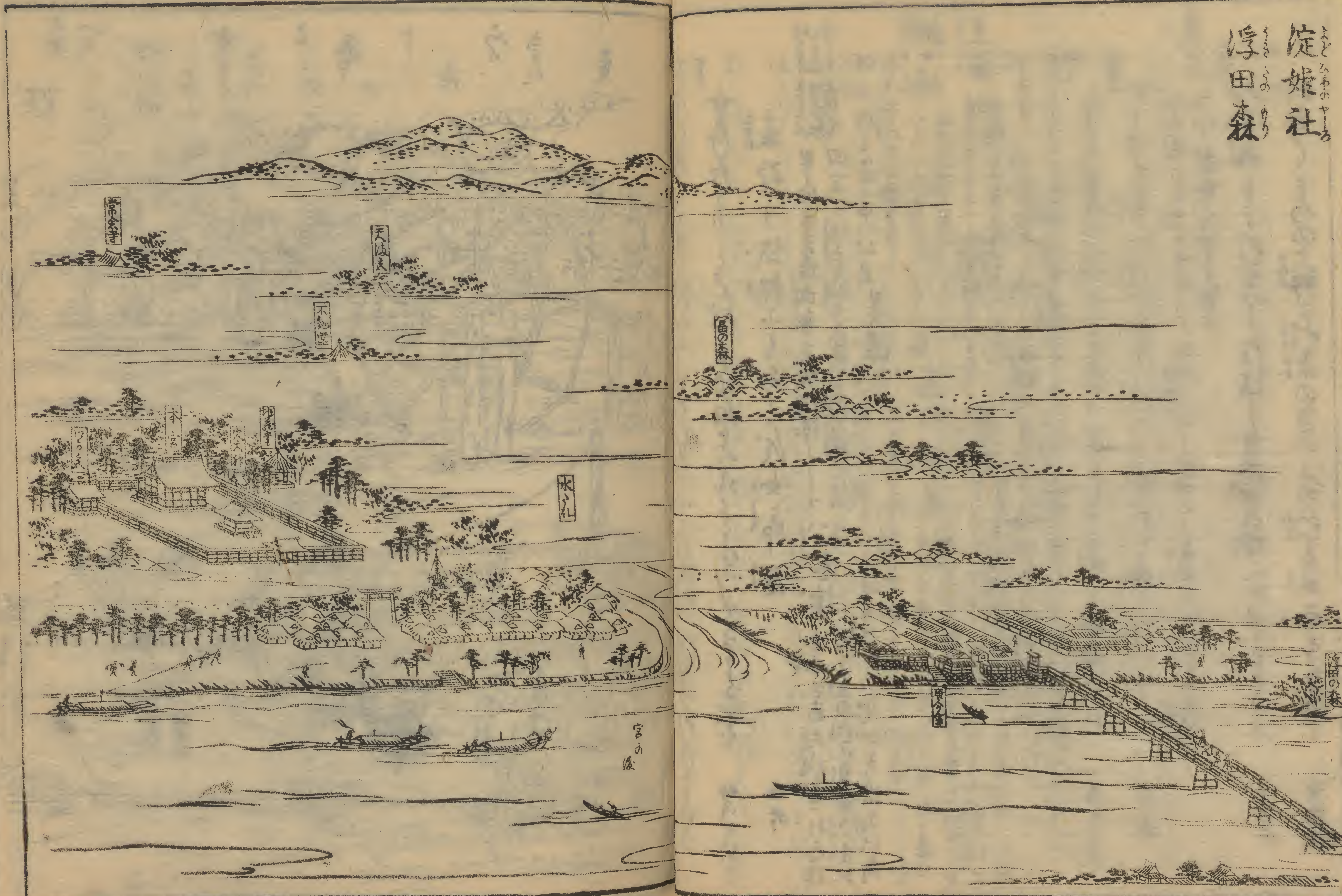
詞花
山しろの石田の杜のいはずとも心のうちをてらせ月かげ　藤原為嗣

新拾遺
かりゆきそふれ都や山しろのいはたのもりも色かはりゆく　後九條

美豆 淀大橋の南西の里なり大坂街道より東にて美豆の御牧とて厩あり入江森野和歌によめり

後拾遺
五月雨はみづのみまきのまこもぐさかりほすひまもあらじとぞおもふ　さがみ

続千
朝なくらの上野に刈萱のきのふのあとを且見えけり　順徳院

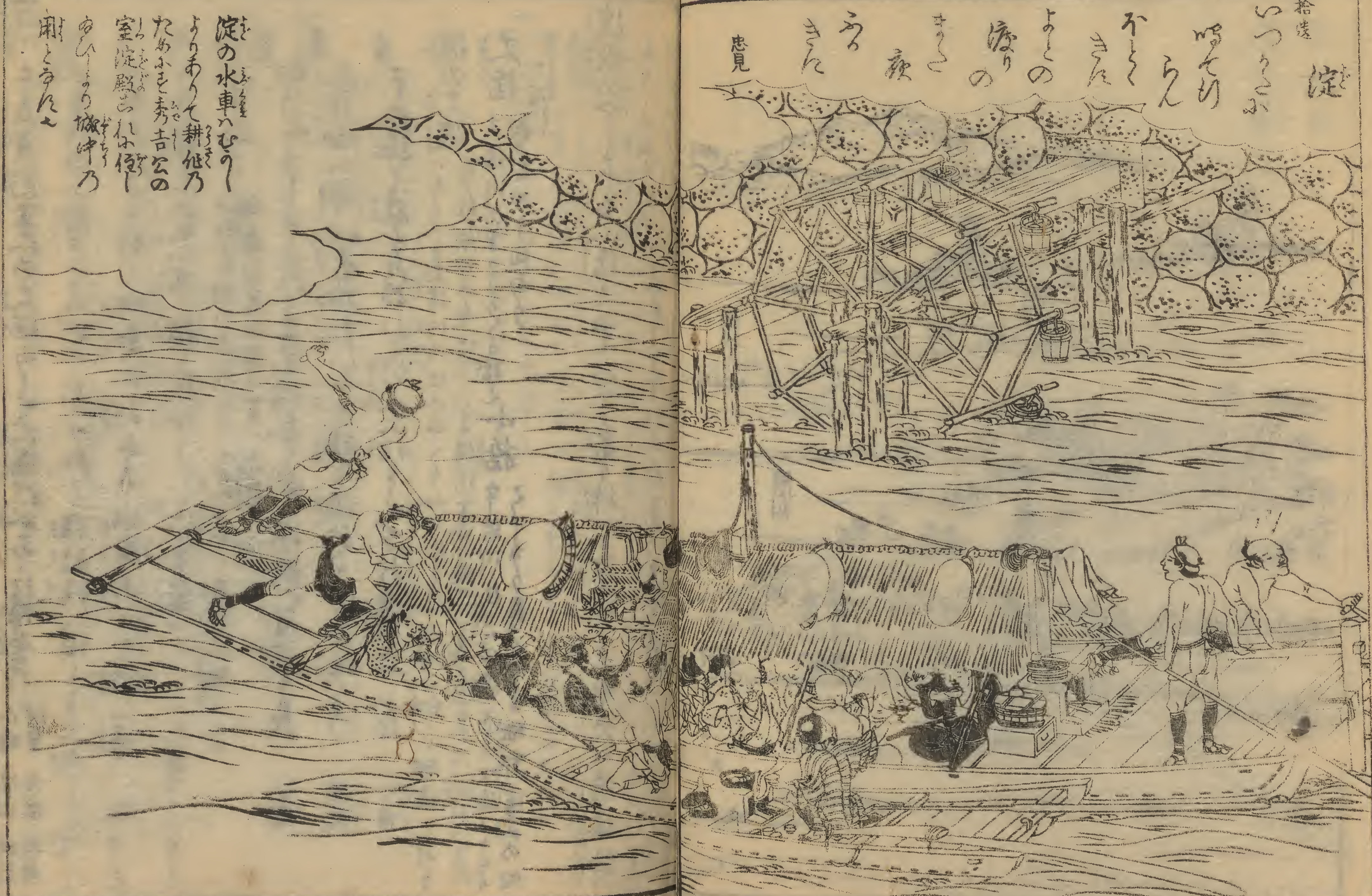


淀姫社(よどひめのやしろ)
浮田森(うきたのもり)

淀(よど)

拾遺　いつかたに鳴てゆくらんほとゝきすよとの渡りのまた夜ふかきに　忠見

淀(よど)の水車(すいしや)ハむかしよりありて耕作(かうさく)乃ためなるを秀吉(ひでよし)公の室(しつ)淀殿(よどどの)これに住(ぢう)し時より城中(じやうちう)乃用(よう)とせられし



淀川は五畿内第一の大河にして六国の水落合て帰会す　山城　近江　河内　伊賀　丹波　摂津
河水は清にして溶々として広く難波津へゆきかふ舟は夜もとも絶ずして又こなたには城郭の汀には水車ありて波に随ひ翩々とめぐる御領主の茶亭橋上のゆききの人も京遼々しくぞ見らるとぞいふべし　此所は鯉の名産にして美味あり高貴の献上とす　城趣の用の故に常に遊猟を禁ぜらる

新古
かりくらしこよひもきまよふ京おもへて淀の河瀬に月ぞやどれる　公衡

風雅
五月雨に岸の青柳枝ひちて梢を渡る淀の河水　俊敬

玉葉
さす棹も及ばぬ程に水に任せて下る淀の河舟　冬隆

淀の大渡　いにしへは木津川御牧の西より北に流れて宇治川に合し舟渡しあり　されば今のごとく木津川を南へ通ぜしは秀吉公の御制なり

大橋　木津川の末にかくる橋をいふ　長サ百四十間あり

小橋　宇治川伏見の澤筆の下流にかかる　長サ七十間　城郭造営の時かけ初し

淀姫の社　小橋の西にあり祭る神は三坐にして中央は淀姫神　右の方は間千観内供　左の方は天神　若宮は本社の西にあり多宝塔あり本尊大日如来作安　本尊は当社の千観法師の勧請なり此所の産沙神とす例祭は九月廿三日神輿一基あり

宮の渡し　当社の鳥居前なり桂川の落合と小橋の小橋への船渡しをいふ　唐人屋本といふは朝鮮人来朝のときは大坂より河舟にて此所より陸地を行けり

天神口　船ヲ着所なり　此所にて乗りかへて天満宮の社あり

大荒木社　いにしへは此所にありしと申伝へ今さだかならずぞ

古今
大あらきの杜の下草おいぬれば駒もすさめず刈人もなし

後撰
大荒木の杜の草とや成ぬらんかりにだにきて問ふ人のなき　忠岑

新拾
郭公きなくとくとて大あらきの杜の夜の母もなつかし　信明

伊勢向宮　小橋の西にあり天照太神を祭る此所　淀の洪水の時は遷宮ありしとぞ

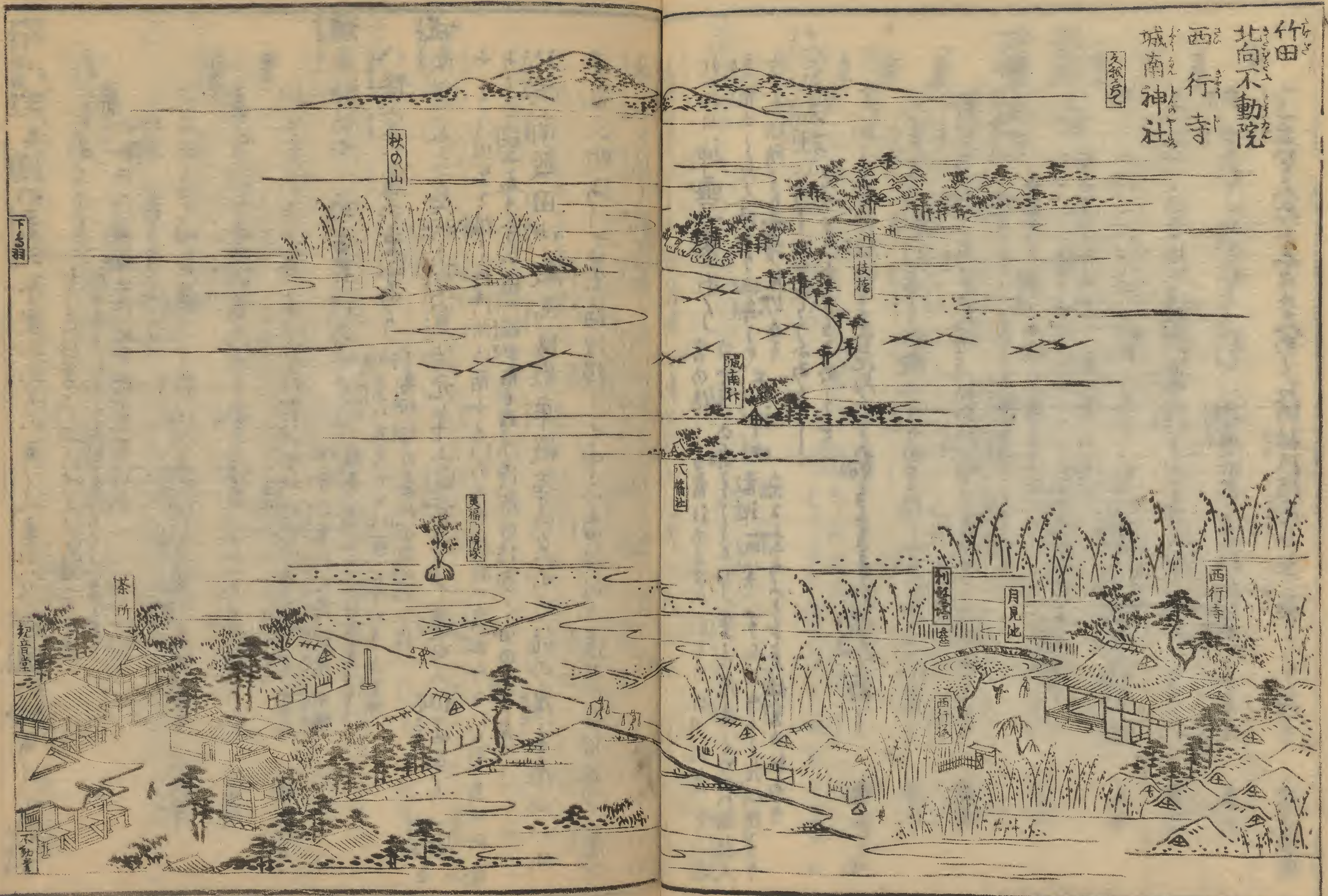
淀田森　むかしは此辺にありしといふ　大荒木の杜は淀の連縄をも称せしと詠合せし和歌多し　後人考あるべし

続古
かくしつつ淀田の杜の下草もみなあをあをとしげりあひにけり　人丸

金
あすかの淀田の杜に住むなる我身とやなれ　為実

新後撰
行きかへる淀田の杜の時雨ぞとみえれば紅葉しにけり　兼氏

続千
下草は人めもまれなる大あらきの杜は淀田に早苗とるなり　津守国道


竹田
北向不動院
西行寺
城南神社
下鳥羽
秋の山
小枝橋
城南社
八幡社
美福門院塚
茶所
観音堂
不動堂
月見池
西行寺
西行桜

芹川里　淀の東北半里にあり　いにしへ天子遊猟の地にして行幸たびたびありし也　むかしは此里に川ありて三尺の根芹生じ故に名とし今は民村となりて人家多し

後撰　仁和の帝嵯峨の御時の例にて芹川に行幸し給ける日

さかの山みゆき絶にし芹川の千代の古道あとはありけり　行平

新続古

君かれし千代の古道分て猶芹川のほとりに若菜摘らん　家隆

続古

けふたにもよそにそあそとれ芹川や竹田のさとの人の立よる　後京極

城南神のやしろは芹川の北にあり　伊勢　石清水　加茂　松尾　平野　稲荷　春日の七社を祭る所なり

八幡宮は森の東にあり　例祭は九月廿日神輿二基なり是騎駈　下鳥羽塔の森竹田の氏神とぞ

城南離宮は鳥羽上皇寛治元年に造営ありて遷幸ありて仙居なり　旧跡は芹川の北なり竹田里を限られ御所の南北に門ありて御殿は東面なり門前は鳥羽街道にして淀に通る今の道は後世作るなり御所の地多く田の字となる

北殿　南殿　田中殿　馬場殿　車殿等の名あり　池の広さ南北八町東西六町にして蒼海を模して中に嶋を作り蓬莱山を築て巌を畳み舟を泛て帆を飛し煙浪渺々として棹を飄して碇を下し其ありさまいはんかたなし　此池にて月卿雲客楽を奏し秋は池水に月を浮べて客秀歌を吟じ上皇ここに来て寛仁の御座所として里人に牛車を永ゆるし給ふ

又鳥羽殿にて宸書に法華を供養し安楽寿院は定海に命じて孔雀明王の法を修せしむされ法皇崩じて後保元の乱となり後白河院は此宮に蟄しまより次第に荒廃して悉く田林となりける

新続古

君すまぬわびしく物悲しく荒はてにける鳥羽田の面の秋の暮　円位法師

北向不動院は城南神の東にあり本尊不動明王は興教大師の作也　当院は鳥羽院の御建立にして王城の鎮護とし宝祚延長の勅願所也　興教大師大伝法院信證上

此の毘沙門天は慈覚の作　最遮生の為に感得し鳥羽上皇に献る　不動尊彫刻の時御首を牧のあたりしとぞ

美福門院の陵　不動院の門におなじ

西行寺は不動院の北西側にあり鳥羽の離宮ありし時此所に住し宅地なり　月見池　剃髪塔　庵室のあとにあり　長谷川氏は西行法師の苗孫なりとぞ　竹田村の郷士

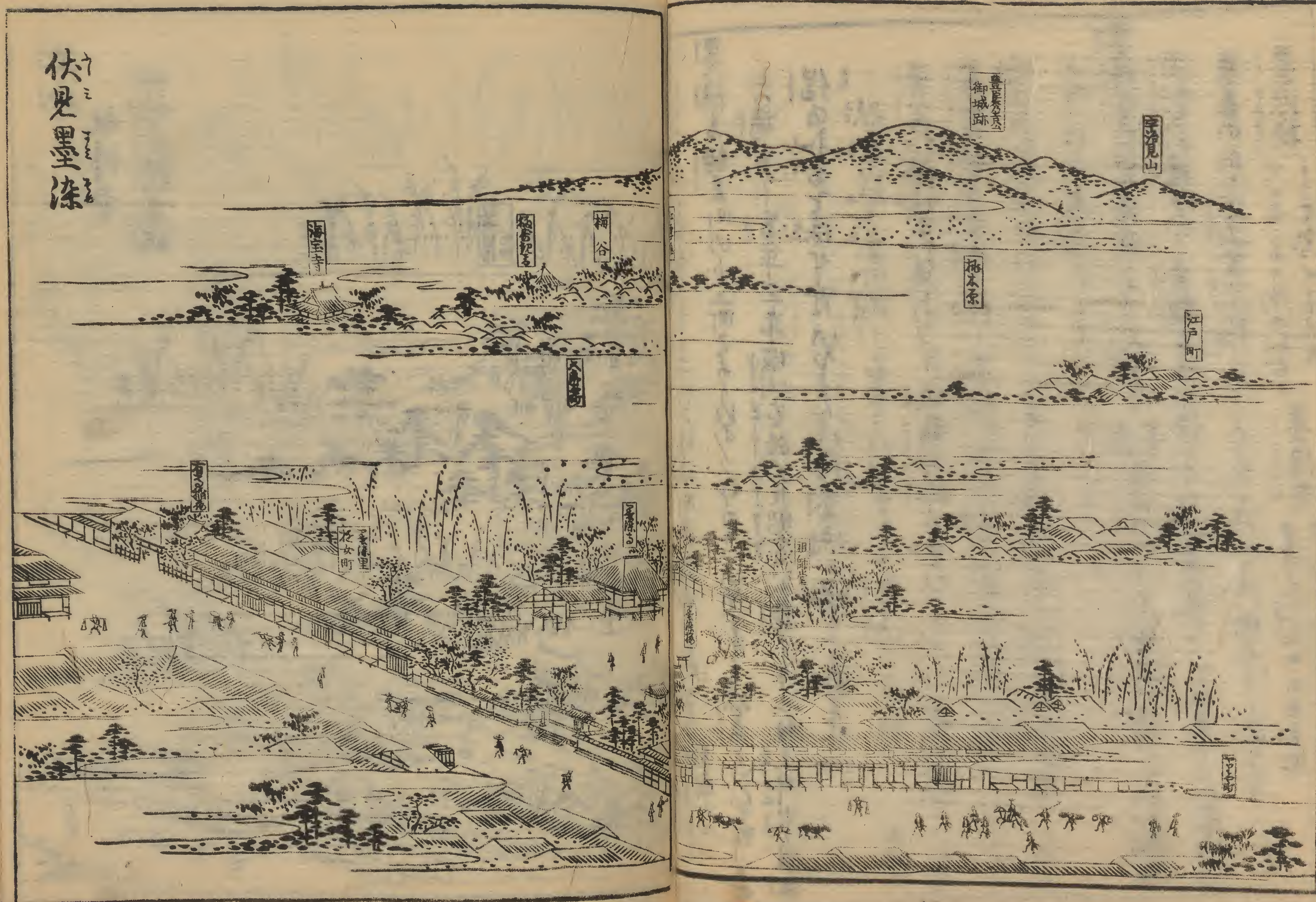
新古

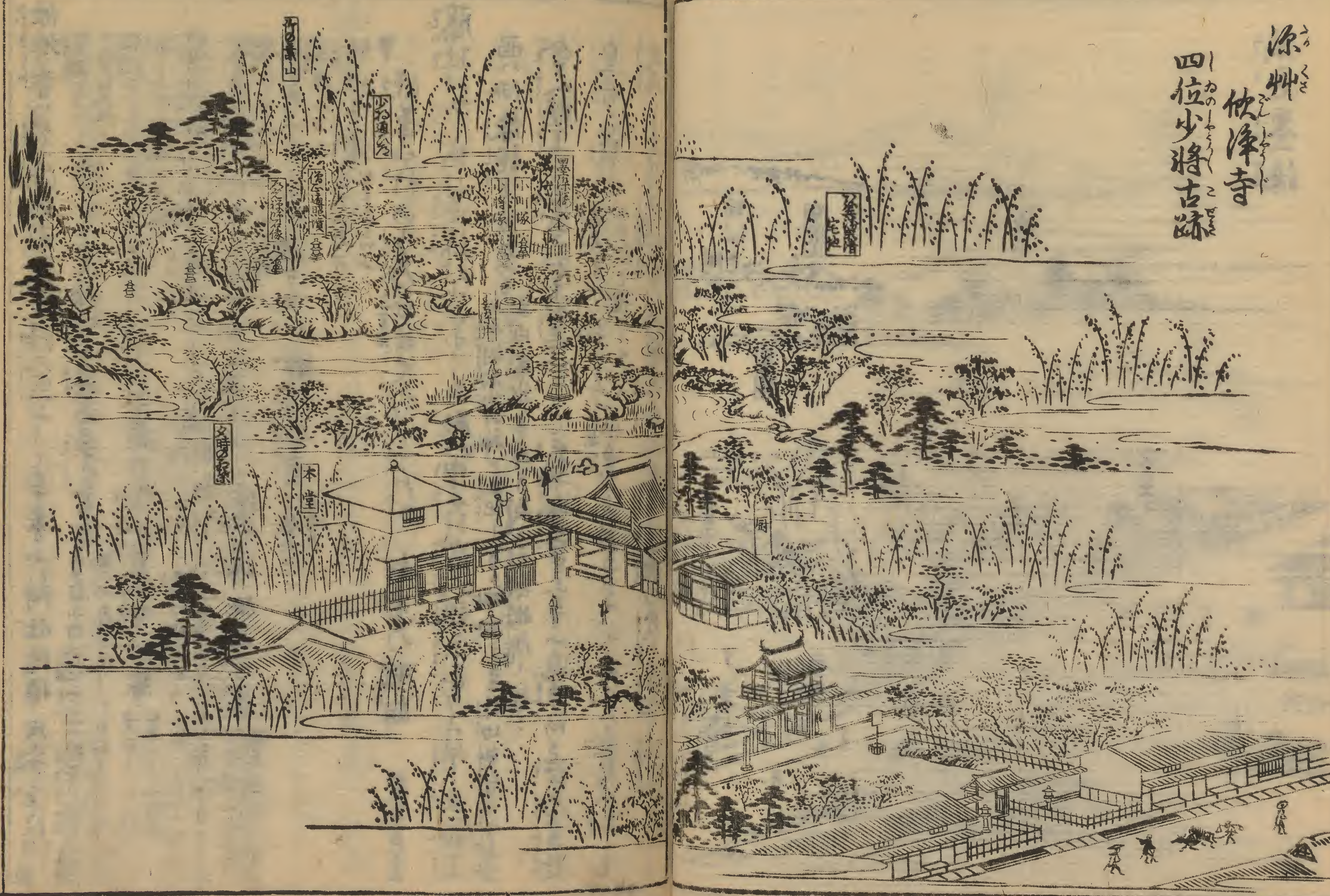
世をすてゝ捨さりける我身をとうふ人は捨てこそあれ　西行法師


安樂壽院
本御塔
冠石
新御塔

安楽寿院は竹田里不動院の北にあり鳥羽上皇脱屣の後城南の離宮に
うつし小殿をたてゝ当院とするなり保延三年十月十九日覚行
法親王を導師として慶讃あり 宗旨は真言にして古義新義ともに修学す
本御塔 北のかたの本堂をいふなり五重の塔なり此ゆへに名とせり 本尊は卍字阿弥陀仏と称す 導像の胸面に
卍字あり此堂の下には法皇震翰の法華経を収むる又当院の寺鎮とす 薬師堂 行基菩薩の作なり薬師如来を安置す
三躰土仏 釈迦弥陀薬師の三像なり弘法大師の作なりとぞ 五輪塔 無銘なり上皇如法経を此所に収らる
碁盤梅 上皇城南の宮中において囲碁を禁しめ碁盤を集めて此樹下に埋めさせ給ふ此ゆへに名とせり当院は今に至りて囲碁を禁じたるなり
冠石 本御堂新御堂の間にあり冠の形に似たるゆへ名とす
新御塔 南の方の本堂をいふはじめは五重塔なり 本尊は地蔵菩薩にして定朝の作也 美福門院の御念持仏
鳥羽院震翰経 鳥羽院の女御美福門院の経 近衛院の御母也 八条女院の経 美福門院の御子なり 此
三重塔は新御塔の脇壇に安置す 二重塔 阿弥陀仏を安置す裏白の作なり此塔は豊臣秀頼公の御建立ありしなり
鎮守 荒神を安置す
鐘木町は竹田の北五町にあり秀吉公伏見御在城の時渡邉掃部が前京へ八方より

しかるのち慶長九年十二月に傾城町免許ありし所なり 今は年経て荒廃に及ぶ
墨染は鐘木町の北二町ばかりにあり昔は此所まで深草といひて野辺なり
みな桜多し寛平三年堀川太政大臣昭宣公薨じ給ふ時上野峯雄
僧の和歌を詠せしかば此所の桜墨染に咲しとなり
古今
深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染にさけ
菅公の神詠には梅となつて飛び趙師雄の遊びし美人は夜梅の花となる
嵩山の松は青牛と化し康頼入道の宝物集には草木心なしといへども
物のあはれを知れることはその妻は墨染に咲今は深草の墨染桜とぞある
とかく此桜は其名までもありしとなんいへり
墨染寺は旧所南側にあり貞観帝 清和天皇 降誕のはじめに宝祚祈のため大相国
忠仁公の建立ありし貞観寺の旧地なり今は法華宗にして日秀上人開基なり
慶長の比は方丈書院巍々として秀吉公も御成ありし所なり
墨染桜 堂の前にあり件の和歌によりてなづくるこの花
墨染井 当寺の門前町の西茶店のきんにあり由来さだかならず


伏見墨染
海宝寺
梅谷
豊臣秀吉公御城跡
江戸町
墨染里
祖師堂


深艸欣浄寺
四位少将古跡
墨染桜
小町塚
少将塚
本堂
厨

欣浄寺ハ墨染の南にあり浄土宗にして本尊ハ阿弥陀仏を安置したまふ 立像
聖徳太子の作 十六歳の作 此地ハいにしへ深草少将の第宅なり 寺記に曰四位少将ハ深草大納言義平卿の長子にして母ハ義宣卿と号す
弘仁三年三月十六日此所にあへなく少将の塚 小野小町の塚 堂のうしろ池の
卒しめたまひぬとなりけり 畔にあり
墨染井 池の畔にあり 少将かよひし道 池のほとり茲の間にあり 小町が宅小野庄
伏見の里へ所縁あるとの此道を通りし故に 百夜がよひし道なりとて義吉公の所に
種ひける時かたしのびなりしとぞ 道元禅師の石像 少将塚の中にあり 道元禅師入宋の
後此所にうつして浄禅寺の 七瀬川 局墳 石像の中にあり
営申しける

竹の下道 かよひちの 伏見の里へ

續千 深草や竹の下道分入れバ 白雲乃明朗 前関白太政大臣

藤杜社ハ深草墨染の北にあり本殿の中央ハ舎人親王 東ハ早良親王
西ハ伊豫親王を祭る 又本朝武功の神と配祀しまつる 神武天皇 神功皇后 時平 武内宿祢 等なり 故に弓兵政所とも号す
舎人親王ハ天武天皇の皇子にして天平宝字三年に追尊ありて崇道尽敬
皇帝と号す 養老年中に勅をうけて日本紀を撰しめ給ふ 早良親王ハ五月五日にして東宮ハ武奥を治めて
走馬をとらせし光仁帝の御宇天応元年に異国の蒙古日本へ攻来るよし
聞へければ天皇の第二の皇子早良親王を大将軍として退治あるべきよし
宣旨を給ふ 親王当社に祈誓して五月五日に出陣しあふ 神威はたちまち忽暴
風大に吹来り蒙古の軍船海にしづみ悉く亡びうせけり 此吉例によりて毎年軍陣
の粧をなし天下平安の祷としたまふ 当社を弓兵政所とも云 此所猶にくはしくへ

旗塚 本社の乾のかたにあり 神功皇后三韓 蒙古塚 当社森の中に七ツあり いにしへ今浮
退治の後旗をおさめ埋みたまへるより うらみ夷賊退治の後軍将の首
をうつして埋て神威をあらはしたまへり 力石 祭日にハ若者の人集りて此石をもちあぐる
現じたまへり ちからくらべしたるなり

深草野ハ藤の森のほとりをいふ 大亀谷にいたる 竹田里南ハ墨染北ハ稲荷
を限るものし 欽明天皇いまだ幼くおはしまし時夢に化人来りて奏し
秦の大津父といふ者を求めて補佐したまはゞ天下安泰に有なんとあり 是によって
後終て曹司に抜ての寵を図して求させ給ひければ此深草里に住る是
我連て朝観し天皇践祚の後大蔵卿に任したまへり 四夷降に治りける
らし日本記にみえけり 桓武天皇の陵ハ東の山本谷口といふ所にあり 車
塚ハ天皇の御車を埋し所とぞ 御輿塚 鎮守松 霞か谷 霧か谷

深草天皇の建給ひし嘉祥寺も今は嘉祥寺畑と號て字にのこれるの
塔は元慶八年に建られしく近江の國米百五十六斛丹波の國米三百七十
九斛に貞觀十二年文勅して寄附ありける三代實録にみえたり仁明
帝の陵同女御貞子の墓あるは左大臣冬嗣公の別業大納言時継卿の山
莊眞幡寸社拜志寺大日寺深草院の陵昭宣公の営給ひし極楽寺も
今は里の名とのみ遺りぬ深草の郷中に高貴の別荘名賢の古
廟靈佛の寺院かぞへがたくありしかども千載のむかしとなりて村老の口
稱にのこり聴ぬ桑田碧海須臾にかはれるはかなしとはいふべし

新古 深草の里の月影さびしさも住こしまゝの野べの秋風　通具

續古 いつしかとかりそめ人の跡絶て積ればゆき乃深草の里　為氏

續千 深草や誰の籬もかれ住て荒にし里に衣うつなり　雅経

鶉の床は深草野の叢に巣をくむをいふ也　此野に鶉の床といふ所一所あり作は其古の事なり後世お字にとりてまつくるとの名

むかしより鶉の名所にして草は他境に勝れしかりしかして都下の詞客中秋
の頃さかりに來りて鶉聲を賞し聞て鶉はあれたる野に鳴その聲艶にて鶉の音をあはれとす
ぬりりし里とよめり故に深草は荒て哀なり
是れは鶉の床も其名のこれりとぞ
深草に鶉を詠合たるは此ぞその始也けるとし

千載 夕されば野邊の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里　俊成

此哥ある人難じて只秋風とありてよかりぬべし身にしみてといふ言葉はあしくと
俊成自いろく忠秋風の身にしみ此哥はもとよりいひて曲るし鶉にうつりての衛人能を
消して逝しとなり

續古 深草の山のすそ野も浅ちふに夕風寒く鶉鳴なり　寂超法師

新拾 深草やうづらの床も跡絶て春の里とふ鶯の一聲　後京極攝政

奥山 深草のおくにある山の奥をいふ　竹葉山 野の内にあり安楽行院の
猿丸太夫住し所なり

續古 ぬしいかにや竹の葉山のをちこちに鶉なくなり　家隆

安楽行院は深草野にあり般舟院の属で本尊は不動尊勧請坐
の二尊なり安楽寺の前に後陽成院の御廟あり
真宗院も安楽行院の西にあり浄土宗にして深草流義の本山なり
本尊は阿弥陀如来にして開基は圓空上人也

藤森社（ふぢのもりのやしろ）





藤の森の祭ハ毎年
五月五日にして当社の
神蒙古退治の為出陣
し給ふ日なりとて是を
宵宮より神前に鎧を
餝りて祭の日ハ一搭稲荷
旅の森ふて廻より
走り馬あり

世に擬牛の佳節に
武者人形をかざるハ
蒙古退治の吉例
より始る



瑞光寺は深草極楽寺村にあり佛殿の本尊は釈迦佛長三尺腹中に五臓六腑あり明暦元年に元政上人草創ありて法華の道場としぬ当寺境内の堂を薬師堂といふ古は極楽寺の薬師堂の遺跡なり

元政墓 佛殿の西にあり塚のうへに竹を植て元政法師常に携へし竹の杖なるが枝葉茂りしとぞ

道の記 元政旧菴にて
この御門日蓮宗なれど常の佛たち数もおほくあるべきをたゞ釈迦のみあふぎ給へるとぞ

落れぬは釈迦に涼しや秋の色　鬼貫

昭宣公の墳は瑞光寺の門前にあり大塚にて廻十間餘上に小社あり 三十番神を祭る

古今 堀川の太政大臣昭宣公身まかりにける時に深草の山にをさめてけるのちによみける　僧都勝延
空蝉は殻を見つゝもなぐさめつ深草の山煙だにたて

極楽寺の旧跡は宝塔寺瑞光寺の境地也 文鏡に曰 深草天皇芹川にみゆきありし時帝御寵愛の琴の爪を洛外にて失ひ給ふ昭宣公幼童の時これを供奉し爪の失せたる所を諸佛に祈りて曰此爪を求る所に伽藍を建んと誓ひけるが果して此里にて得給ひしかば帝に上り遂に極楽寺を創建ありしと

保胤が極楽寺の賦に東山の勝地象外の境壺中の天にて巽には瑠璃山あり翠浪の湧が如く谷水は玉虹の流をなすと山はおそろしくして其勢千万仞の山に掛るが如し飛泉ありて細しといへども其音遠境に聞ゆるなり 今の宝塔寺七面山の瀧なるべし


寶塔寺
七面社
拜殿
日像廟
千躰堂
番神堂
拜殿
本堂
方丈
鐘樓
歴代墳
寺中
元政古跡

百丈山石峰寺



深草山寳塔寺は瑞光寺の北にあり法華宗にして本堂には釋迦多宝の二尊高祖
日蓮上人の像を安置す廟塔には日像上人のかゝれし題目の石塔婆ありて山下には
日蓮日朗の遺骨を収むといふ此を宝塔と称す　日像の説法石は釋迦千躰堂の前にあり鎮
守は社あり三十番神を祭る七面明神社は本堂の後にあり是経宗擁護の神なり
祭は九月十九日也　鳥居の額は元政上人の筆也當寺は舊極楽寺にして眞言律なりしを
延慶年中に住職良桂律師日像上人の教法に従ひて法華の道場と改む
百丈山石峰禅寺は寳塔寺の北に隣る開山は黄檗の六世千呆和尚也（退院の後此地に隠棲す）
佛殿は釋迦佛額は濟世法王又左右に聯あり共に千呆の筆也表門の額を
即非の筆にして高着眼と書す
薬師堂は佛殿の前にあり本尊薬師佛長四寸恵心僧都の作にして多田
満仲公の念持佛也村上帝御宇天徳二年に摂州多田郷において満仲公
伽藍造営ありて沙羅連山石峰寺と號し本尊を安置す其後文永
の比兵火のために諸堂回禄に及びければ本尊の像を石函に収め山中に埋みおけり

霜星累りて慶長元年の春沙羅山ニ夜〻光あり郷人これを怪み其光の本を穿しに八ッの石函を得たり蓋ニ沙羅連山石峰寺薬師仏の銘あり則一宇を営て安置に同八年に菴主宗玄といふもの夢中の霊告あり并に近き所に寺を遷し安置せバ普く人民を化益せんと宣ふ宗玄佛意ニ任て自分ニ且ふて勧化をなして五条橋より因幡堂に暫安奉しさるく五條の橋东ニ若宮八幡の南に堂舎をいとなミて石峰寺と号く寛永年中に黄檗千呆和尚常ニ此寺に詣で薬師堂ニ尊信ありて曰我異国より日本へ渡り黄檗山の祖席ニ司職たる事偏ニ霊佛の應現なりとて厚く瞻禮恭敬せられけれバ忽公命ありて今の如く百丈山をいとなミて此尊像を移されし石峰寺とぞ號しける

茶碗子 清泉の銘ハ當寺の門前南の名にあり 茶の湯ニ可なりとて好人これを賞ぶ

即成就院ハ源草れなり太亀谷ニあり本尊ハ阿弥陀佛の坐像也脇壇ニ二十五菩薩とかん恵心の作也此霊像ハ恵心僧都叡岳横川ニ於て説法しぬるに附老人の老翁来りけれバ那れ南伏見里に住るものハ斛を捧ん来るハ恵心其詞ニ應じて伏見ニ至る指月のかたより艸庵より一の翁出て佛間ニ請じ極楽浄土の寶味なりとて捧しかバ僧都奇異の思ひをなし老翁ハ何人ぞと問ふ答て我ハ佛在世ニありし唯摩居士の化現也師の法徳を感じてこゝに来り恵心を拝さんとて拝し其ハ正真の如来を拝せんと願ふ翁則西の空ニ向ひて敬禮しければ忽然として紫雲たなびき妙なる楽と共ニ本主阿弥陀佛二十五菩薩空中ニ現れ給ふ御ありて老翁諸ともに西の方ニ飛去る僧都感信の餘り則来迎の相を自刻で當寺の本尊とし給ふ又壽永の頃奈須與一宗高平家追討の時出陣の時當院ニ詣で祈誓して曰今度戦場ニおゐて譽を得さしめ給へ當院を再建せんとなりと則佛前の幡をとりて笠印とし西海ニ下り壇の浦ニて扇の的を射て名誉を天下に露しは是本尊の擁護なりとて堂舎を修造し願を成就の奇特を世ニ知らしめんとて即成就院とぞなづけゝる

那須與一宗高石塔 堂の前にあり高さ五尺許ニして 並銘なり笠石ハ墳の内ニあり

軒端梅 塔婆のかたはらニあり 由来詳ならず



即成就院
那須與市宗高塔

大亀谷ハ藤の森より勧修寺に経て山科追分に出る街道なり此所に茶店ありて容貌艶しき女あり名をお亀と称す自然と所の名に呼て大亀谷といふ

吉利倶八幡宮ハ勧修寺村の産沙神なり 祭ハ九月廿一日当社の神木に種字の梵字といふあり弥陀の梵字なりとぞ今板にゑりて社頭にあり

此所の名を勧修寺村といふ

勧修寺ハ大亀谷の艮の方なり 当寺は古ハ上旨ハ華厳に真言を兼たり本尊ハ延喜帝御等身の観世音なり 長吏ハ之を兼す 開基ハ範俊僧正延喜四年の建立にして本願ハ右大臣定方なり東大寺の寺務にして勧修寺門跡と称す

氷室池 当寺の庭中にあり

大石屋浦 勧修寺より七町ばかり乾山科郷西の山岩屋明神の馬場先北側薮の中にあり 大石内蔵助良雄浅野家断絶の後こゝに潜居す近年碑の銘を建る

栗栖小野ハ勧修寺より北花山のひがしの野をいふ

後撰

さし杉のくるすの小野の萩の花ちらん時にしゆきて手向ん　大納言旅人

田村麿墓 栗栖野醍醐道の西の林の中にあり今此所を馬脊坂といふ 弘仁二年五月廿三日薨ず年五十四

大宅寺 勧修寺の北大宅村の南にあり古此所ハ大織冠鎌足公の居館なり今ハ曹洞宗 月坡和尚一宇を建て大宅寺と号す此里を大宅といふ…

冬嗣公の御孫高藤殿狩のとき小幡の山林のあたりの園をはうひ入に雷雨はげしくなりて今宵ハ此屋に宿り十三四ばかりの女のありしに契りを結び佩刀一腰をのこしとゞめ給ひ其後六年を経て兼て此屋を尋ね給ひしに此女ハ一子をもちたりしが六ツ七ツばかりなるを見せ給へバ先に佩刀をのこしとゞめ給ひし事を思ひ出し給ひて二人ながら御所にともなひ帰り給ひしとぞ此家の主ハ此郡の大領宮道弥益といふ者なりしとぞ此女子二人を誕生ありし男子ハ泉の大将定国女子ハ三条右大臣定方なり此姫君ハ宇多天皇の女御となり醍醐天皇を生給へり依て弥益を四位に叙し家を寺となし給ふ今の勧修寺是なり已上小世継物語の大意

興福寺の旧跡 大宅村のひがしにあり旧号を山階寺といふ 興福寺橋ハ岩屋の社鳥居の巽にあり

松菊池 岩屋の社南の薮にあり

小野随心院ハ勧修寺の東にあり曼荼羅寺とも号す真言宗にして開基ハ仁海僧正なり法務ハ小野御門跡と称す摂家の御連枝住職したまふ 開基仁海ハ小野僧正といふ寛仁二年六月大に旱す此僧正に勅して神泉苑において請雨経の法を修せしむ時に大雨降事三日なり其後九度詔ありて皆雨をふらす世人雨僧正と呼ぶ永承元年五月十六日寂す年九十二 已上元亨釈書

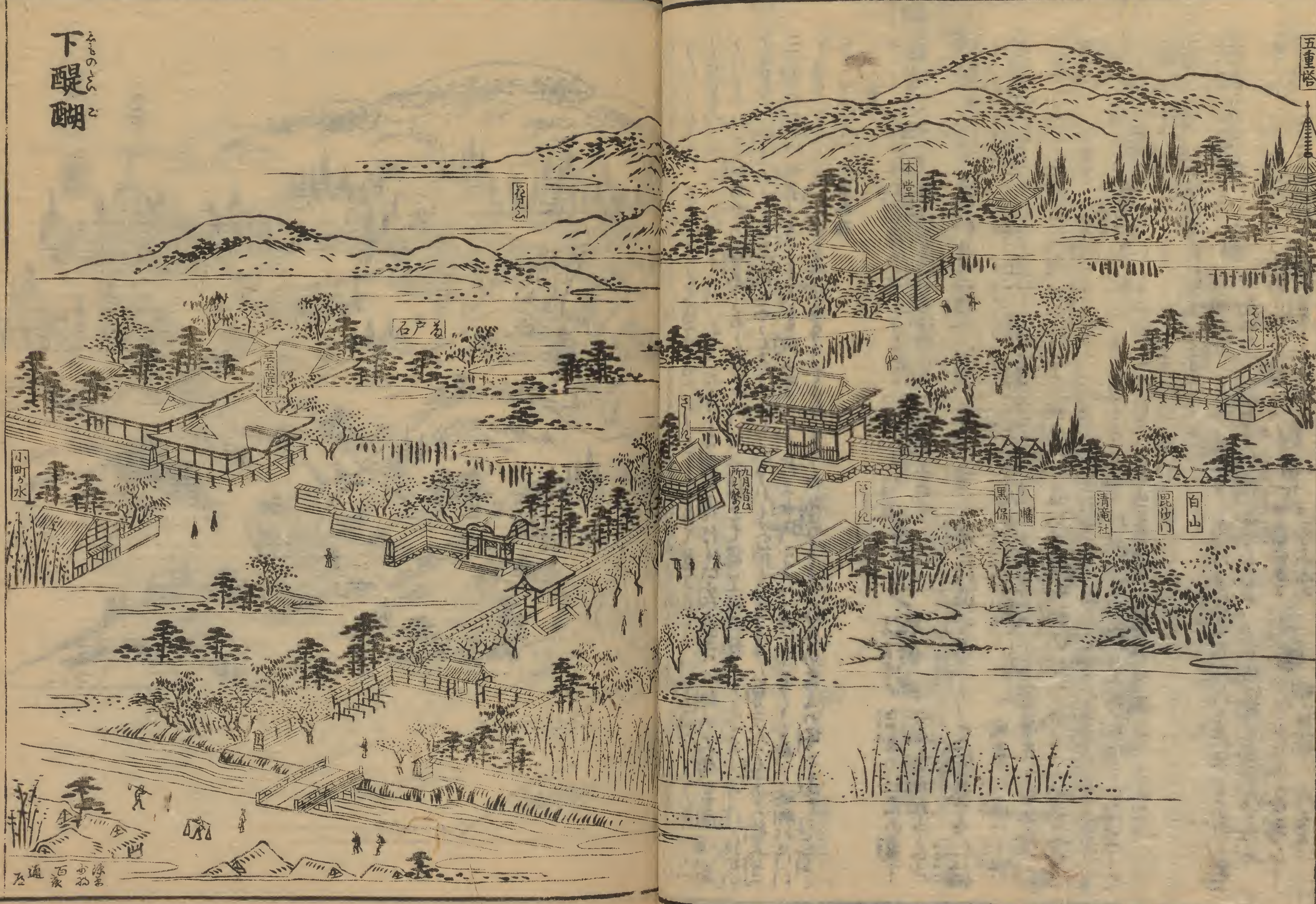
小町水 門内南の薮の中にあり此所ハ出羽郡司小野良実の宅地にして女小野小町住給ひし時此水を愛して粧ひし所とぞ

榧の樹 庭のおもてにあり深草少将百夜かよひ榧の実をかぞへし所とぞ

深草少将の通ひ路 醍醐往還の西側薮の中にあり墨染の南欣浄寺より小町の宅へ百夜のかよひ路なり竹林となりてもいまに一株もはえずといへり

櫻塚 小野村の西にあり小野小町の文塚とも又一説には後小野宮道の墓ともいふ

野色山 道の西にあり小町の貧塚 四位少将百夜通ひし料を積し所なり


下醍醐
しものだいご
五重塔
本堂
三宝院宮
小町ヶ水
黒保
八幡
清滝社
毘沙門
白山


上醍醐
五大堂
如意輪堂
白山社
開山堂
経蔵
登坂
奥の院行場
岩間寺道
薬師堂
清瀧社
毘沙門
醍醐水

深雪山醍醐寺は小野の南なり山上を上醍醐といひ麓を下醍醐と號す山上ハ
真言宗にして修験道也 此所を當山と号す本山といふハ聖護院の流義 開基ハ聖宝尊師
理源大師と謚す 延喜四年の建立にして醍醐朱雀村上の三代帝王の御願なり
法務ハ三寶院御門跡と称す 摂家の御連枝これに任せらる 當山を醍醐と號するハ聖宝
尊師佛法相應の霊地を得んが為一七箇日祈念したれバ五色の雲當山の
峯に聳ゆ則ち山に登りたまひしに巡るに獨の老翁来りて清泉を掌に受て
醍醐味なりといひて尊師にあたへ此山ハ古佛練行の洞諸天衛護の砌
佛の遊處名神の所居之地なり吾ハ地主の神横尾明神也永く此地を尊師
に献ずべし早く精舎を営て廣く佛法を弘め群生を利しなバ擁護せんと
云終て見えずなりぬ又楷の為に三寶を唱ふ尊師弥感涙を流し此由を上奏し
延喜帝殊に叡感ありて除病延命のために當山の諸堂を造営したまふ

本堂 薬師如来を安置す 後秀吉公の修建なり 開山堂 弘法大師理源大師の像を安置す 圓禄の 五重塔 佛言 三寶院の庭中 説相の[illegible]

曼荼羅を 清瀧権現 娑迦羅龍王第三の娘 [illegible] 藤戸石 藤戸浦にて佐々木三郎盛綱高名せし浮洲の岩也天正年中聚楽亭より此所に移す

長尾天満宮 本堂の北にあり九月九日にて神楽 二基あり醍醐郷中の産沙神とも 花見山 の跡也 秀吉公花見遊宴 天正軍記に委し

上醍醐 麓より山上まで二十七町 山路して一町毎に標石あり石面に梵字を刻む 権僧正成賢の書なり 女人の登山を制禁す

清瀧社 龍神社向石社 山腹瀧の樋 不動堂より 醍醐水 閼伽井とも 五大堂 不動明王を本尊とす 開山聖宝の作 四尊は社の内にあり

理會僧都の作なり延喜帝の御願にして朝敵平将門降伏のために修しありし本尊なり 如意輪堂 本尊如意輪観世音を安置す

聖宝の作なり西國巡礼所 薬師堂 本尊薬師佛ハ恵理僧都の作なり 堂内に准胝観音を安置す 観賢僧正之を奉納 [illegible]
にして第十一番なり

後さらに祖師堂 中央聖宝尊師 南ハ弘法大師 北ハ観賢僧正 之上ハ聖宝の作なり悪地これを [illegible] 悪地を退治しあへこ五人の鐘則聖宝の作なり
の鱗二片とも堂内にあり 寂静谷 祖師堂の北にあり毎歳七月五日六日當山の千日諸ともに群参し此所まてもゆくなり
稀

夫當山ハ松杉蓊欝として常に白雲横たく諸を封じて山巍々ぞ
して旭日の出る事遅し霊泉ハ混々として玉を注ぐが如く尭の時徳
茂し清平なれば醴泉出夏后の時俊才官にあるときハ則醴泉涌と
いへしも此醍醐水のことをいふなるべし



醍醐天皇陵は三宝院の北人家の東にあり　人皇六十代の帝諱は敦仁 宇多帝第一の皇子在位三十三年延長八年九月廿九日崩じ玉ふ 寿算四十六延喜御門と称す

朱雀天皇陵は同所陵町にあり　醍醐帝の皇子にして六十一代の主上なり 在位十六年天暦六年八月十五日崩じ玉ふ 聖寿三十歳 天暦御門と称す

一言寺は醍醐の南里にあり　真言宗にして醍醐寺に属す 本尊は千手観音にして安阿弥の作也 内侍堂は当寺の本願阿波内侍の像を安置す 少納言信西の女なり

直谷南禅院は醍醐山の巽にあり 成賢僧正隠遁の地なり 本尊は阿弥陀仏の坐像にして春日の作なり 側に地蔵尊を安置す 此里は農夫常に尊信し是を一夜の地蔵と 世人田植の地蔵と號す 多く村田植しときを

笠取山は醍醐の東にあり 民村多し 巽の峠に山城近江の国境あり 岩間寺は醍醐より三町ばかり東にあり 石山より八里ばかり東也

道本さるあそのたくさや出ぬらん村雨そそぐれぬ笠取の山　西行

笠とりの山をたのみしひもなく時雨に袖をぬらしてきけり　頼基

日野（ひの）薬師（やくし）



日野薬師ハ一言寺の南日野村にあり法界寺と号す本尊薬師如来ハ金銅の坐像也日天月天十二神二王等運慶の作にして左右に安置す 世人乳出の祈願す
殊更霊験あらたなり 旧阿弥陀堂にして後壇にハ丈六の弥陀の像を安置す
定朝の作也初ハ日野左中弁資業卿の本願にして諸堂魏々として観音堂
五大堂大門の蹟今田畑の字となりて当寺の境外にあり日野村の則

日野家別荘の旧跡あり 今土人内裡の芝といふ

重衡の塚日野村薬園の中にあり 三位中将重衡卿治承四年南都東大寺を焼亡す故に大衆炎のうちに焼失しぬるが故にいかり重衡卿の後重衡卿ハ鎌倉より引上けられ木津川にて誅せらる重衡卿の北の方大納言佐局ハ日野におハせしが骸を東大寺の聖俊乗坊よりうけとり法界寺の辺に葬り首ハ高野へ送り墓を此所に築しめけり くはしくハ平家物語にあり

長明方丈石ハ日野村のおく五町計外山の山腹にあり石床二間四面高さ丈計一説に名を千人石といふ 北を笠取炭山の往還あり此地ハ奥ふかく絶景にして遠近の佳境一瞬の中に遊ぶ 地勢ハ風景方丈記にくはしく見えたり 昔を嶮の奥に巌の中より清泉湧出る所あり炎暑の節樵夫の谷間ハせんげん弘法大師此巌を穿ちたまひしとぞ

東鑑に曰建仁元年十月廿四日鴨社の氏人菊大夫長明入道法名蓮胤依雅経朝臣之挙此間下向奉謁将軍右大臣實朝公云云

方丈記に曰
住家ハ則浄名居士の跡をけがせりといへどもたもつ所ハわづかに周梨槃特が行にだにも及ばず もしこれ貧賤の報のみづから悩ますか将又妄心のいたりてくるハせるか其時心更に答ふる事なし たゞかたはらに舌根をやとひて不請の念仏両三遍申てやみぬ于時建暦の二とせ弥生の晦日頃桑門蓮胤外山の庵にしてこれを記す

月かげハ入る山の端もつらかりきたえぬひかりをみるよしもがな　長明

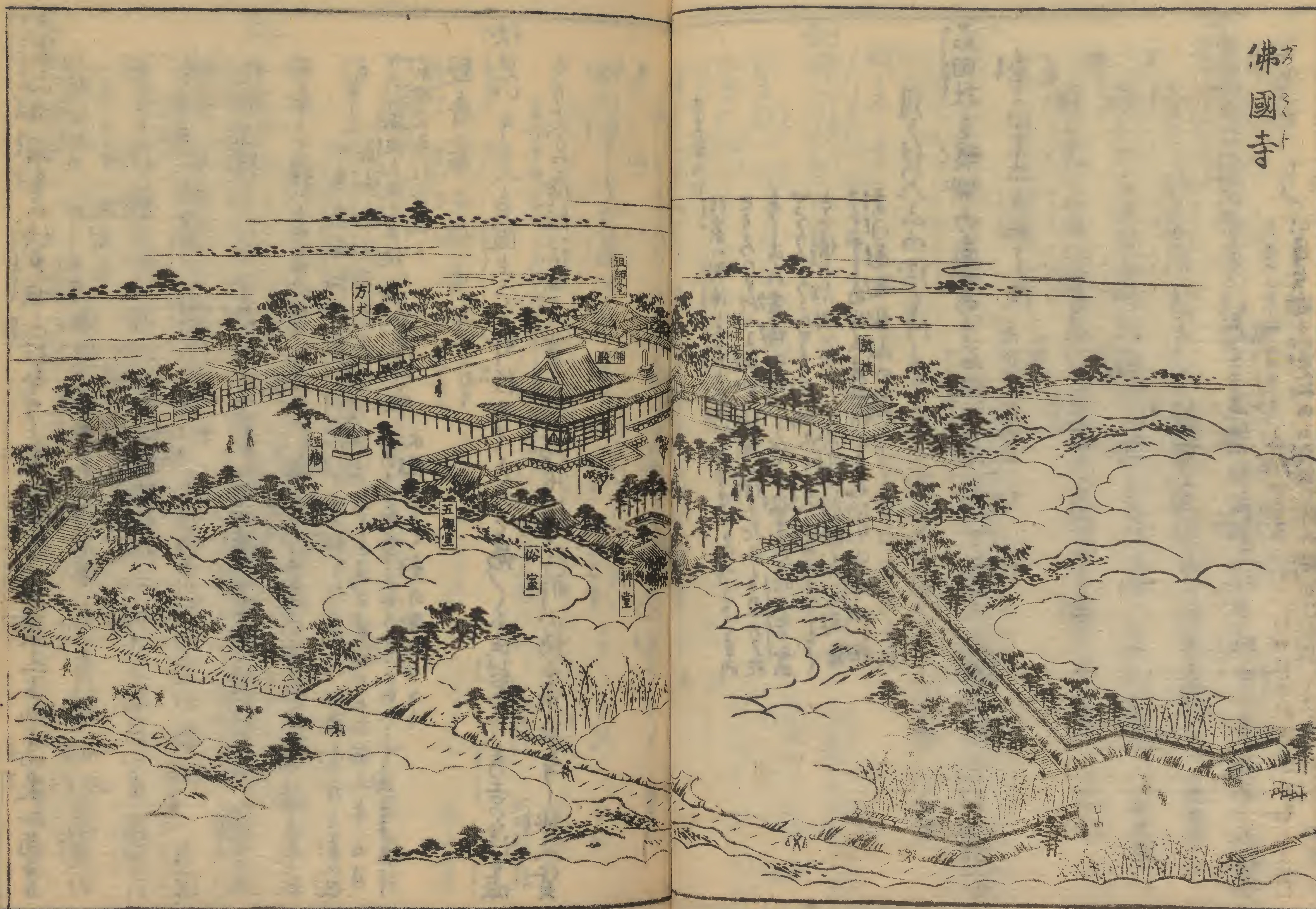
石田杜ハ醍醐の南にあり石田社ハ氏家の中にあり天照大神日吉山王を祭る此里の氏神とす わがおもひハ石田の小野と詠じ

千載
雉子鳴る石田の小野のつぼ菫しるしばかりぞ残るなりける　顕季

続古今
柞ちる石田の小野の風ふかしくれてゆくらむ秋そさびしき　中務卿親王

日
暮ぬとて安らはぬきそ石田の小野ハ紅葉なるらん　順徳院

小栗栖里ハ石田の西にあり此所より木幡山を越て伏見城山に出る道あり古明智越といふ 天正十年明智光秀山崎の合戦に敗し江州坂本の城におもむくとて此道を過る小栗栖の土民出て竹の鑓を以て害す此所ハ今にまねくせり



佛國寺

天王山佛國寺ハ伏見城山にむかひあり開基ハ黄檗山五世高泉和尚なり大明福州の人なり承應三年日本へ渡海し佛殿の本尊ハ釋迦佛を安置し額 普光明殿 高泉の筆なり柱に聯あり 四面机に呑吐九天日月 千重欽擁従雕彩里山河 共ニ高泉の筆也禅堂に額 選佛場 即非の筆也食堂の額 五觀堂 高泉の筆 開山堂の額 無盡燈 一乗院信敬法親王の筆也堂内ニ高泉和尚の像を安置す又大悲閣にハ観音を安置して額ハ高泉の筆也南の門額 天王山 本庵の筆柱に聯を揚る高泉の筆也 四泉宏奉鎔佛國 紫山玉立灋天王 高泉碑銘 紫銅を以てこれを鋳る諸堂在る亀の形にして共ニ紫銅にて正徳元年五月廿六日摂政太政大臣従一位家熈公これを記す

金涌水 右のうさ松の下にあり旱といへども涸る事なし水軽くして茶の湯に叶へり

観音巌 千佛臺 共ニ当寺の後山にあり

伏見いにしへハ朧々たる野径にして纔に民村あり秀吉公御在城なりし大名屋舗諸職工人貴人軒端をならべ町小路に市を立て都へ貨物を通じて交易をなしける

野山里 澤田亭覚 故人和歌ニ詠る

山

新古 伏見山松のかげより見わたせばあくる田面に秋風ぞふく 俊成

新續古今 衾ふかくも夜ハあらしふかゝり伏見山松風さむき秋の夜すがら 慈鎮

里

新古 夢かよふ道さへ絶ぬ呉竹のふしみの里の雪の下折 有家

新勅 朝戸あけて伏見の里にながむれば霞にむせぶ宇治の河波 俊成

玉葉 すがはらやふしみの里の浅ぢふにむなしき露のかゝる袖哉 式子内親王

野

新續古今 女郎花たれ下紐をうちとけてたれふしみの野べに宿らん 藤原道信

田井

玉葉 呉竹のふしみの田井にかりそめにむすぶいほりもやどるぬさらん 慶運

華

玉葉 おもひあまりて侍るころ人の伏見にまかりけるにつけて遣はしける 庭の草道もみえぬまでかりそめに出しにもどりて帰りなれて 尋て入袖に哀をかけよとて露もこぼるゝ庭の虫の音 西行

城山 文禄三年秀吉公伏見城を築給ふ其後慶長五年石田が逆乱に城に火かゝりて今ハ城跡の丘となる山に桃を栽る数千株繚て是へ夭々たる艶陽の節春色に酩酊し桃花の風に袂を翻す遊客これを伏見の桃林といふ

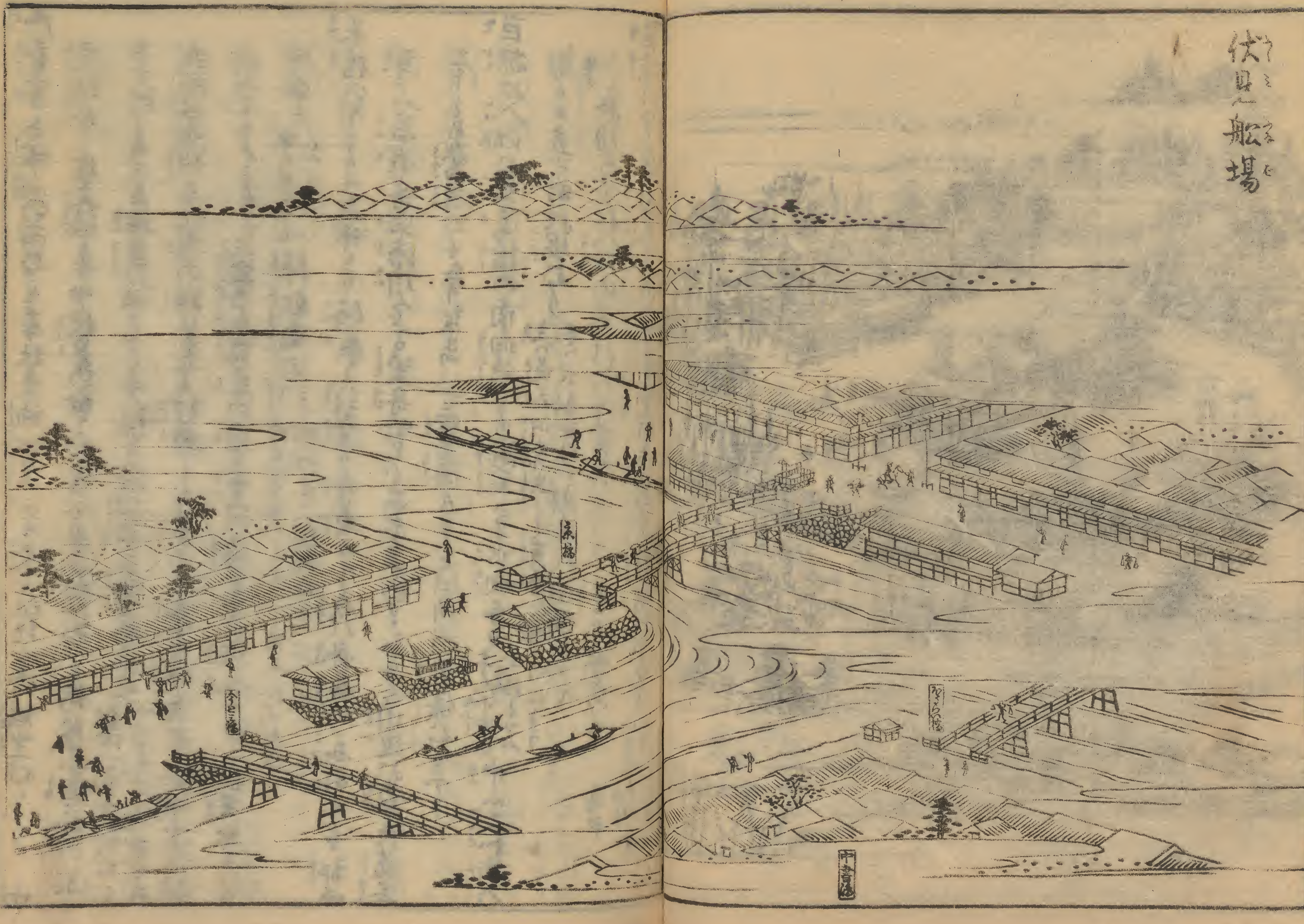
我宿ハふしみの桃の花ざかり 丈草

城跡やとんとむかしの桃の花 蝶福

梅渓 城山の北五郎左町の東にあり此地ニ梅花多し早春の頃花盛りの時清香馥郁たり梅渓といふ此所にあり

御香宮（ごかうのみや）





伏見船場
京橋
中書島

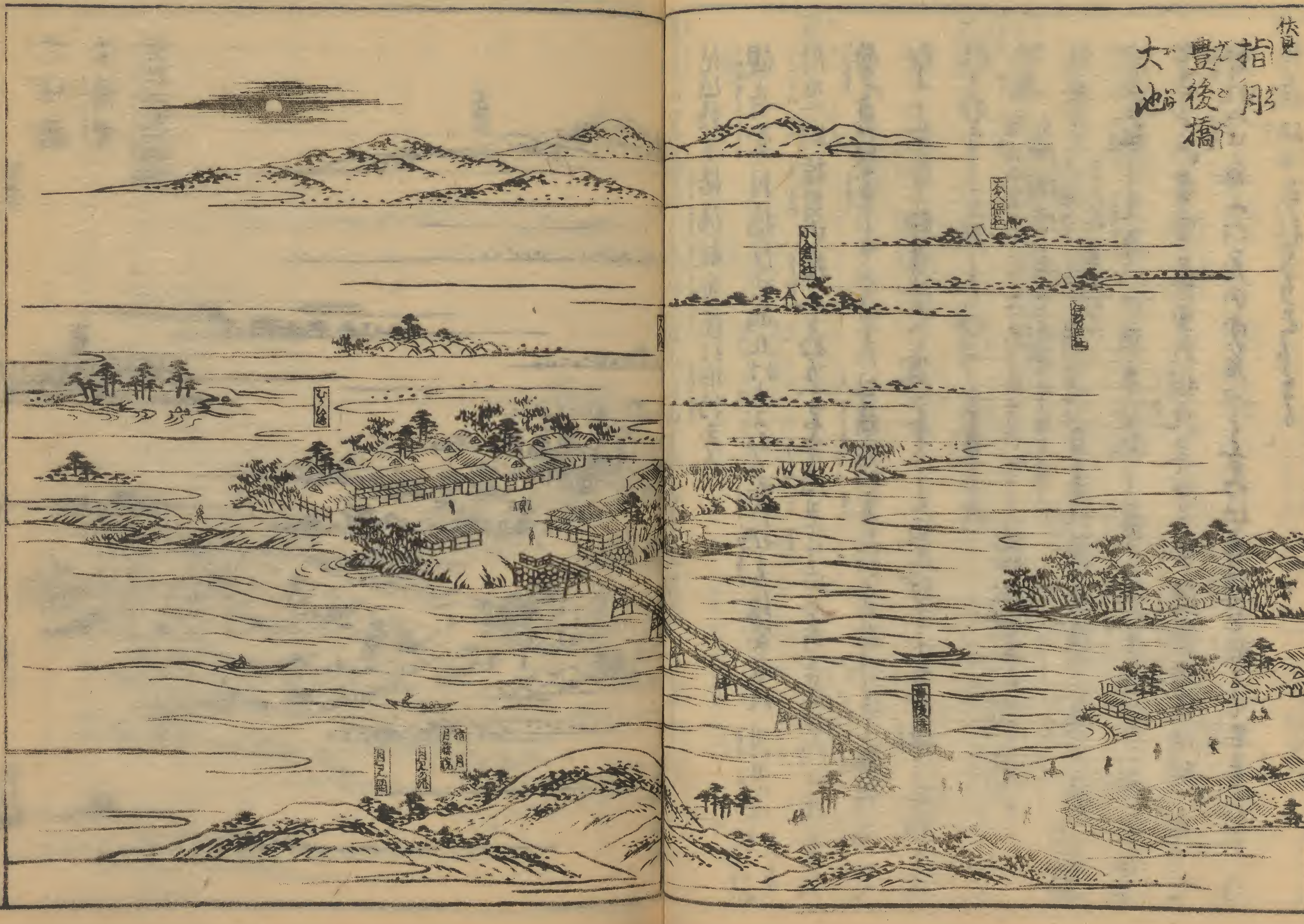
御香宮ハ城山の西にあり本社ハ神功皇后にておはします此地に御鎮坐ハ
歴詳ならず文禄年中伏見の城をいとなみ給ふ時此やしろを大亀谷の東
にうつしけるに神祟ありしかバ又此旧地に遷坐ありし也　其地を古御香宮といふ當社の御旅所なり
九所堂ハ九座の神をまつる神輿も九基あり御香水ハ鳥井の傍にあり此
水によりて名とす　寶石ハ鳥居の内敷石の間にあり諸人これをとりて寶とする
所なり世人めくら石といふ　拝殿南の門 伏見の城中にありしをうつしたるなり 欄間の彫物等花美なり
京橋のほとりハ大坂より河瀬を引登る舟着にて夜ハ舟並のあかりも都に
通ふ高瀬舟宇治川くだる米舟などことごとくつどひて川辺の家ハ旅客
をとどめ鶯鳥あまた聲をあげて饗應するも此所の風儀なるべし
巨椋の入江ハ豊後橋の南向嶋より渺々たる水面なり　土人小倉のお池といふ　中に大和街道
ありて五十町の堤なり　夏ハ蓮花河骨生じて炎暑を避るのたよりあり　冬ハ水鳥數多く集りて漁獵をなさん

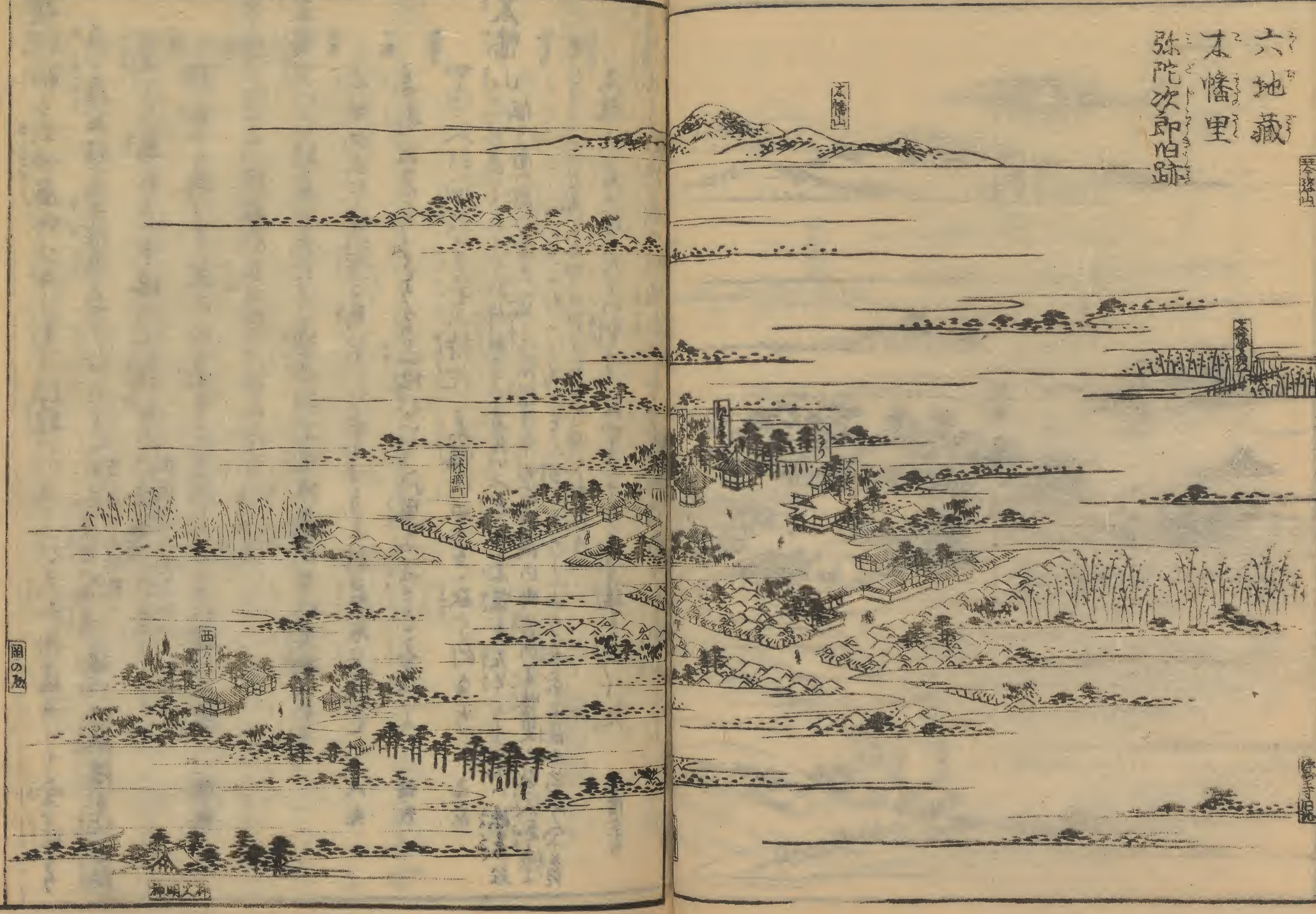
續古　秋ほくるゝ入江の月は浪まに又光れまして堂とみえけり　為尹

巨椋のやしろハ入江の南小倉里の東にあり春日明神をまつる此里の氏神なり　祭禮ハ九月十日

指月山月橋院ハ豊後橋の北の東にあり毘沙門天を安置す弘法大師の
作也此地ハ洛陽般舟院の旧跡なり
観音堂 月橋院の西丘の上にあり聖観音を安置す　月見の池 観音堂の前にあり
月見の園 指月の後山にあり又名宇治見といふ秀吉公此所に楼臺を
営て月を賞しぬ今ハ只姑蘇城の宴たけなわなりしも鷓鴣飛んで
むなしく秋怨を銅雀臺に舞ふあそびも西ざけにして今淋し此地の月
はいにしへむなしく照してもむかしに変らんぞ
六地蔵 指月の東八町ばかりにあり此所のならびハ醍醐街道西ハ伏見の町中に　京街道あり南ハ黄檗宇治にいたる
地蔵堂 大善寺と号す浄土宗也 東面の角にあり　本尊地蔵菩薩ハ仁寿二年小野篁
冥土に趣き生身の地蔵尊を拝し得て後一本の木にて六躰の地蔵を
きざみ當寺に安置す保元年中に平清盛西光法師に命じて
都の入口毎に六角の堂を立てて此尊像を配して安置す今の
地蔵巡りこれよりはじまる

伏見
指月 豊後橋 大池




六地蔵
木幡里
弥陀次郎旧跡
木幡山
六地蔵町

櫃河橋は六地藏町の中にあり此橋はいにしへの大和街道にして金が辻より
五ケ庄を経て宇治橋に掛りしなり（今は小倉堤の街道は秀吉公の時造る） 櫃川は水源を北山科
小関より流れて宇治川に落合ふ（上にて櫃川といふ所によりて勧修寺川小栗栖川ともいふ）

新勅　都出てふしみを越て明がたはまだうちわたす櫃川の橋　俊成

琴弾山は六地藏の艮日野の西にあり　名義詳ならず

木幡里は六地藏の南にあり濵薬師不焼地藏此里の東側にあり

拾遺　山城のこはたの里に馬はあれどかちよりぞ行君を思へば　人丸

千載　[?]駒[?]とうちたる山城のこはたの里に[?]人よ　俊頼

新續古　岡の人の問ぬよるをも待佗て木幡の里に衣うつなり　為家

木幡山　陵は六地藏より北之今は佛國寺の邊をいふ也しぞ木幡を氏号にして小は源兼俊
陵は南は岡の屋五箇庄を限る今の六地藏の町古の木幡里之故人和歌に
かち人と詠むは此里にむかしは馬を人多くありしより懸ねに詠てそへ人に来る
あるひは此所にて馬をもかしおとくちにてゆく也なり

新後拾　木幡山君がゆかくは駒うし抜かちよりぞ行諸を迷ひし　高階宗成

木幡関は六地藏の北城山のふもとにあり今関山といふ

新後拾　[?]なれぬ仇人の里の関守は木幡の山の今に君ぞとゝ人々は　家隆

柳大明神は木幡里にあり天忍穂耳尊を祭る

岡屋は木幡の西宇治川の邊にして民村あり古の街道筋なり

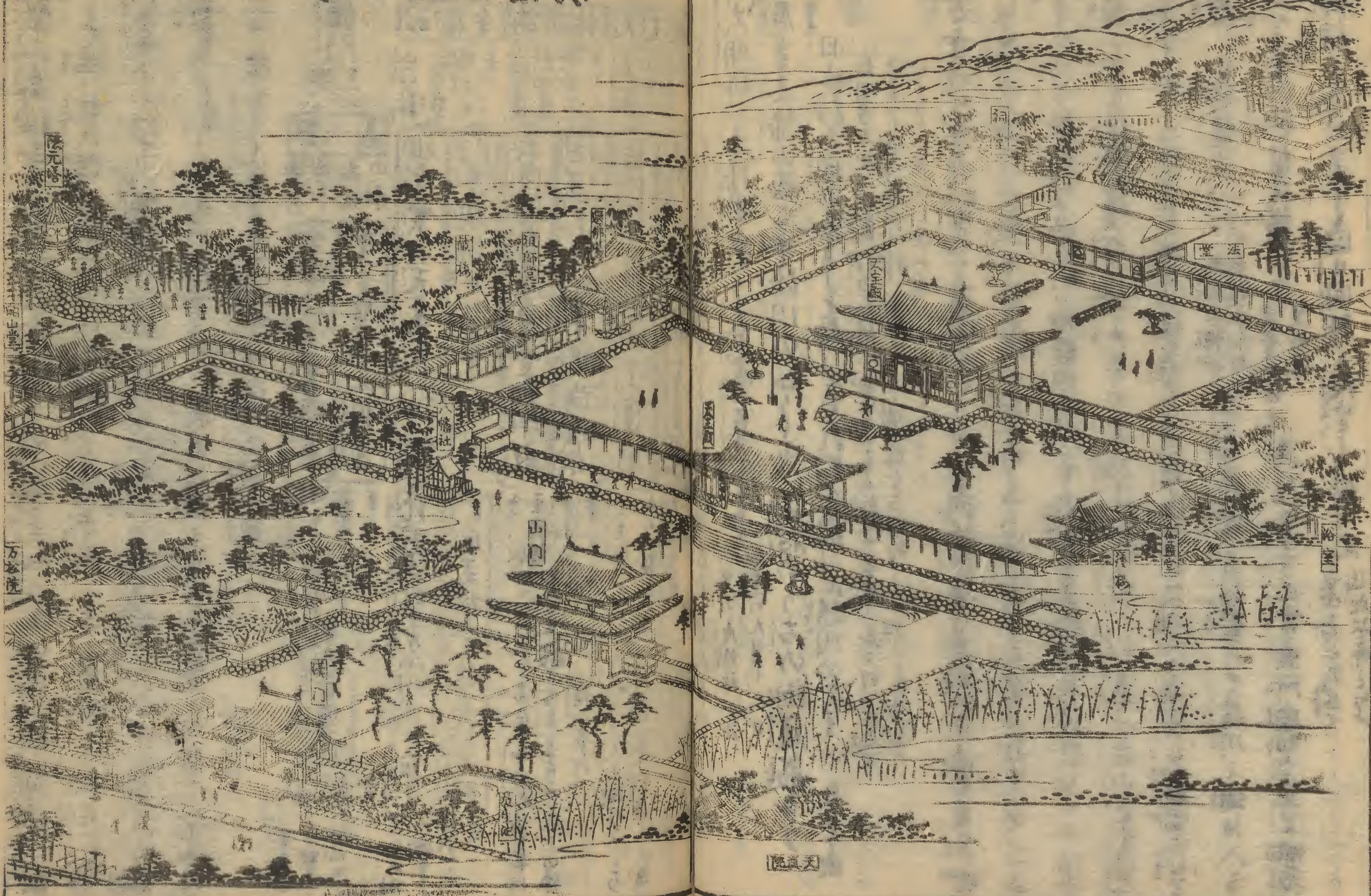
此里の鹿が神社に例祭は九月十六日

續古今　日くれて岡の屋よりぞしるかなる櫃川のへし　[?]

長明方丈記に曰若跡の白波に身をよする朝には岡の屋にゆきかふ舟を
ながめて満沙弥が風情をぬすみ若桂の風葉を鳴す夕には潯陽の
江を思ひやりて源都督の行をならふ

西方寺弥陀次郎の舊跡は五箇庄にあり本尊阿弥陀佛は金銅の立像長一尺
安原に當國淀の東一口といふ所に悪次郎といふ悪人あり常に殺生を業とす又
して邪見放逸なりある時頭陀の僧来りて門戸に立悪次郎焼鉄にて僧の
額に當て追放僧おも怒る色なくして過ぬ次郎怪で跡を慕ひ西山光明寺
明寺に入て見れば堂内の釈迦の像を拝するに額に焼鉄の火印あり次郎忽懺悔の心を
發して佛道に入是より御鉢の釈迦と云今光明寺にあり又ある夜霊夢を蒙りて淀川に網を入る
に紫金の佛像を得たり　當寺の本尊是なり　其後當寺の常照阿闍梨を戒師として
修行し遂に二人ともに同日同時に往生しけるとぞ　世に悪次郎と名付て弥陀次郎といふ

黄檗山萬福寺



黄檗山萬福寺は五箇庄の南にあり開山隠元和尚は大明福州福清の人にして姓は林氏諱は隆琦字は隠元なり本朝承応三年に東渡し万治二年公命によりて山城国宇治郡大和田の勝地を賜ふ寛文元年九月より伽藍を草創し精舎の経営多くは異風を摸し名て黄檗といふ同十三年四月二日後水尾上皇より大光普照国師の号を賜ふ

漢門 惣門をいふ

第一義 漢門の額なり 高泉の筆

宗經海道重恢廓
聖主賢臣先仰尊
漢門の柱の聯なり 高泉の筆

山門

黄檗山 山門二重屋根の額なり 隠元和尚の筆

萬福寺 山門の軒の額なり 隠元の筆

祖席繁興天廣大
門庭顕煥日精華
山門外柱の聯なり 木菴の筆

地鍾秀秋日月山川同炎聳
門開萬福人天龍象任登臨
山門内柱の聯なり 隠元の筆

旃檀林 山門の後の東向の額なり 千呆の筆

大道從斯進步直登兜率殿
法門由此外翻身投入旃檀林
東向の聯 千呆の筆

天王殿 天王殿の額なり 木菴の筆

福地鍾靈特感四王護園
慈門現瑞大啟三舍度人
即非の筆

天王殿 布袋和尚の像を安す 金色なり 四天王の像脇に安す

威德莊嚴 天王殿のうしろ東向にかゝる額なり 即非の筆

首冠兜率感應三洲功第一
手擎寶杵護持正法德維摩
東向にかゝる聯なり 千呆の筆

大雄寶殿 釋迦佛の坐像を安す

大雄寶殿 重層にかゝる額なり 木菴の筆

萬德尊 同堂の軒にかゝる額なり 木菴の筆

[illegible]
[illegible]
同堂にかゝる聯なり 即非の筆

兜小丹山設長生之画
紅粘白月耀玄堂之燈
同堂にかゝる聯 高泉の筆

法堂 堂の左右に木魚を補り

獅子乳 法堂の額なり 隠元老人 費隠の筆

捧唱交馳國師千古猶生
象龍圍繞靈山一會儼然
同堂にかゝる聯 千呆の筆

威德殿 … を安す

威德殿 同堂の額 千呆の筆

仁明昭日月
威德鎮四河

山河正氣 威德殿にかゝる所の額 千呆の筆

祖師堂 達磨大師 金色の像を安す

祖師堂 同堂の額 木菴の筆

選佛場 … を安す

選佛場 坐禅堂の額なり 隠元の筆

禅堂 地藏尊を安す

大顧堂 禅堂の額なり 大眉の筆

伽藍堂 伽藍神の像を安す

伽藍堂 木菴の額なり 聯もあれど略す

食堂

禅悦堂 食堂の額なり 木菴の筆

開山堂 隠元像を安す 後水尾院勅書の額あり

通玄 開山堂の額 隠元の筆

開山堂 同堂の額 木菴の筆 聯もあれど略す

壽藏

天開壽藏長生日
地湧松風不老春

隠元碑銘 隠元和尚の塔にあり 隠元の筆なり

舎利殿 開山堂の後の山にあり 後水尾院より給ふ仏舎利を安す



華厳室 釈迦仏を安んず 節竿旗 大雄宝殿のまへにあり 萬松岡 当山の茶毘所也 妙高峰 黄檗山の巌をいふ

五雲峰 妙高峰の南にあり

明星山三室戸寺は黄檗の南大鳳寺の北にあり本尊千手観音は閻浮檀金の立像にして長八寸弐分也宇治山の東岩渕の岩屋より出現し給ふ 西国十番の札所也

光仁天皇の御本願にして智證大師の開基也中興は隆明法師

宇治山は三室戸山の南也喜撰法師此所に住給ひしとなん

続拾 宇治山のむかしの庵の跡とへば都のたつみ名ぞふりにける 法眼慶融

後撰 宇治山は紅葉をとてこそは長月のすぎ行日をもしらずぞありける よみ人しらず 女

喜撰嶽は三室戸より一里ばかり巽にして樋川村の上にあり高く岩崛ありてこれを喜撰洞といふ此絶頂より喜撰法師登天せしといふ

或は阿弥陀井陸おも喜撰が住家を三室のおくなりといふ長明無名抄云三室戸のおく廿余町ばかり山中へ入て宇治山の喜撰が住ける跡あり家はなけれど堂の礎などさだかにあり是ら必ずたづねて見るべき事也とぞかける又古今の序に宇治山の僧きせんはことばかすかにしてはじめをはりたしかならずいはゞ秋の月をみるにあかつきの雲にあへるがごとし

木がくれて茶摘も聞くや子規
はせを

都の巽宇治の里は茶の名産にして高貴の調進年毎の例ありて製法他境にぬきんでし山吹ちり卯の花咲そむる比茶摘とて近里のしづの女白き手拭をいたゞき赤き前だれを腰に纏して茶園に入り聲おかしくうたひつゝ謡ひて興じあへる也陸羽が茶經にも詳にしるし侍り



宇治里 あるひハ兎道ともかけり 都より行程四里にして宇治橋の東なる宇治郡西なる久世
郡とむかし應神天皇第五の親王兎道稚郎子ハ帝位をゆづりたまへるをかたく
辞したまひて閑居しおはします宇治宮と号し兄大鷦鷯皇子に譲りたまひて
父帝の勅なれバ位に即べきよしをすゝめたまひしかど互に譲りたまふ事三とせに及
なり遂に宇治宮にてみまかりたまひしかバ兄の親王即位したまへり仁徳
天皇と申奉る又皇極天皇ハ大和國飛鳥宮より近江の比良宮へ行幸
ありし時宇治里に一夜泊りたまふ尾花を刈りて菴をつくらせたまひ行宮となさ
しめたまふ故宇治都といひ侍る

新勅万葉 あそらかりて御ゆきにみゆれ給ふをよみ侍る
秋の野の尾花かりふきやどれりし宇治の都のかりいほしおもほゆ　額田王

後拾 いにしへの都のあとをたづぬれば秋風さむき宇治の都を　成盛

新続古 さびしさに月やかりてぬるらむさこそ宇治の里人　雅経

名産 宇治の名産ハ氷魚 鱣 鰻 餅 一名宇治丸 團扇 茶磨 風炉 の炭等なり
茶ハ本朝の極品にして天下に名高く顧渚山の甘露にも鳳凰山
の龍焙にもまさるべき歟 梅尾の明恵上人種を異国より
得たまひ脊振山に栽置てこれを岩上茶とぞ名付けられけるより宇治の
風土茶園に可なりとてさかんに栽初しなり

槍捨石ハ三室戸より宇治橋に至る路にあり 石面二方に釈迦の像を彫

推が本北社ハ彼方の町に鎮坐し西岸の観音ハ此北にあり浮舟宮ハ宇治の小波戸と云
所にありて橋姫宮のうへなりし川の西なりけれバ源氏宇治十帖にちなみて
いにしへより名高くいひつたへしにかの物語に浮舟の君木玉にとられんとせしハ
うしろの木の下に捨られあるハうたてくらせたまひて薫大将推が本北空
しき庵にうつして中の君ハつらびあれて山のあさりにまいらせたると
も皆此わたりの名蹟にて物換り星うつりてむかしを慕ひ侍る

宇治川水源ハ琵琶湖よりしてつたひ滔々とながれ石山の大津を経て山城
めぐり巌に觸れて宇治に落淀川に入 此間に鹿飛岩といふ所あり

新古 もののふのやそうち川のあじろ木にいさよふ波のゆくへしらずも　人丸



千載　朝ぼらけ宇治の川霧絶〻にあらはれわたる瀬〻の網代木　定頼

新古　暮れて行春の湊はしらねども霞に落る宇治の柴舟　寂蓮

山吹の瀬は融大臣此地に別荘ありし時川岸に款冬を多く栽られしよりの名なりけるとぞ

続古　花の色のをられぬ水にさす棹の雫もにほふ宇治の河長　定家

新拾　ちりかゝる款冬の瀬の暮れ花にさほさすうちの河長　西園寺相国

橘小嶋崎は宇治橋の川下武町にありし之　平家物語に曰平等院の艮橘の小嶋が崎より武者二騎引かけ〳〵出来り一騎は梶原源太景季一騎は佐々木四郎高綱なり人目には何とも見えざりけれども内々先を争ひけるらん梶原は佐々木に一段ばかりぞ進んだる佐々木如何に梶原殿此河は西国一の大河ぞや腹帯のびて見えさうぞ締給へといはれて梶原さもあるらんとや思ひけん左右の鐙を踏すかし手綱を馬のゆがみに捨左右の鐙を踏透し腹帯を解てぞ締たりける

続古　嵐ふく小嶋が崎の花れ山ずや八十うぢ人のかざしぬらん　光俊

袖の香や猶とゞまらん橘の小嶋によせし夜半のうき舟　太上天皇

源氏物語　兵部卿の宮宇治にかよひて浮舟をゐて舟にのりて大将殿の人〻さわがん橘の小嶋とて御舟しばしさしとゞめたるを見給へば兵部卿

年ふるともかはらん物か橘の小嶋が崎にちぎる心は

女もめづらしとおもひてありまの

橘のこ嶋の色はかはらじをこの浮舟ぞゆくへしられね


宇治
興聖寺
恵心院
離宮
八幡
観音堂
朝日山
開山堂
本堂
秋葉
恵心院
山ぶき

宇治橋は孝徳天皇の御宇大化二年に元興寺道昭和尚此橋をかけ初しと

いにしへは橋是より西にあり 明衡往来には東に望ハ橋寺洛陽西に顧ハ宇治の長橋と云

三の間水 山城の名水なり槇田の橋下龍宮より漏出る水此所へ流来るなりといふ又一説

又は瀬織津姫天女の社壇の下より流出るとて秀吉公伏見御在城の時茶の湯に汲しめ給ふ

通圓が茶屋 橋のたもとにあり此ところにて往来の人に茶を調て売茶す

南は茶店に通圓が像あり むかしより宇治橋掛替のときは此家も公勢に沙汰して造りたまふとぞ

橋寺は通圓が茶屋のむかふにあり常光寺放生院と号す本尊地蔵菩薩開基ハ道昭和尚也其後興聖菩薩さいかうして橋供養しぬるとぞ

離宮八幡宮は橋寺の南にあり宗神二座にして上の社は応神天皇仁徳天皇下の社は兎道の尊を崇奉る

是平等院の鎮守にて宇治郷の産土神なり

神輿三基 例祭は五月八日

又社は当社の北にあり離宮乃摂社なり 離宮と号するは往古此地に宇治天皇の離宮ありしゆへ自然の称号とぞ又一説に

当社の神は民部卿平忠文が霊なりといへり則此地は忠文の別荘にて其後は...院の御宇天慶三年三月平将門征伐の時忠文卿貞盛忠文等将軍としてゆくに及ばず将門は追討せしにより勅賞のさたありしに小野宮大臣清慎公とかや申されけれ九条右大臣実頼公宣ふは刑のうたがはしきは軽くすべし賞のうたがはしきは重くすべしと申されしかども忠文は是を恨みて怨霊となりたる也八ッの爪を



野まで通りて血を注ぎ給ひ断食して死たり其まゝ悪霊となりさまざま祟給
ふしかれば御弟の家を絶ゆかりくて此霊を宥んとて神といはひて宇治に
離宮明神と崇め後泉涌寺院の鎮守
治暦三年十月七日正二位をさづけ奉り

朝日山

朝日山を離宮の後山なり 兎道尊陵 朝日観音 此山腹にあり

風　朝日山みねとけたるのくきより八十うち人もわかな摘らし　為家

日　あさ日山まだ陰くらき曙に霧れより早もうちれ心本うの○　資明

朝日山恵心院は離宮の南にあり真言宗にして開基は恵心僧都也本尊は大日如来は
弘法大師の作薬師堂の多る像も同作又恵心僧都七十六才の像堂内に安置
本堂の額 恵心院 持明院基時卿の筆也開基源信僧都は和州葛木郡の人也
して姓は清原氏也叡山慈恵法師に法を受顕密の教をよくきはめ一乗要
決往生要集阿弥陀経疏大乗対倶舎抄因明相違等を著し恵心院の
僧都となり大唐南湖知礼法師に向書を送りたまへば大に感歎し答
釈をおくりて是をたる寛仁元年六月十日徒弟あつめて念仏をさせ其の
おりぬれば教を我の疑しきを問のべしとてみなく安定と念さゝしめ其後備ふ
さしけ上足慶祐法師を之人数とどめて其は縁をしげ小念珠 寿七十六にて
天楽空にきこえ奇香もれなど山中の草木ことく西になびきしとなり
趙宋皇帝僧都の道誉を聞て塔廟を建影像を安しぬのひろがちし世人に記

新古　我ぶにもまた極楽にむまるなるもとて皆むかへてん　僧都源信

仏徳山興聖禅寺は恵心院の南に隣る曹洞宗にして開基は道元和尚也仏殿
には釈迦仏を安置額 興聖宝林禅寺 青蓮院尊純法親王の筆也当寺むかしは
深草里にあり 今墨染の南欣浄寺の境内是なり旧地なり 正保年中万安和尚中興して諸堂を建
城主永井直政の建立なり川岸より門まで琴坂といひ左右に藤を植て
山頂を透垣し朝日山を庭中にとりて白楢を植ては猛虎をたぐり躑躅咲
見られて宇治の川瀬の声を鑑へたまへは法を聴て龍の室に入床を献て
虎の堂に飛くるも此禅刹のならへなるべし

山吹や宇治の焙炉の匂ふ時　はせを

観流亭 岸の上興聖禅院にあり　亀石 観流亭の汀にあり形亀に似たり　中宿芝 恵心院下岸の川かみにあり


家集
鳥羽院の
御時小面今ふ
江上蛍多
といふ事を
よみ侍る
いさや
これ
蛍の
ねいも
志ら孫
玉江の
芦れ
みゆぬ葉そ
ある
源三位頼政

槇嶋は宇治橋より乾八町ばかりにあり 宇治橋より豊後橋まで凡五十町の堤あり 名を槇堤といふ 此間に槇嶋上嶋下嶋
筆の民村あり又上嶋より英饒への
舟わたしあり是を渡といふ

金葉 宇治川の川瀬も見えぬ夕霧に槇の島人舟よばふなり　基光

新勅撰 河風に夜さむの衣うちそへて月にぞあかす槇の島人　為道

橋姫社は宇治橋の西詰にあり 今礎存せり むかしは二社ありし一社は洪水のために漂流す

古今 さむしろに衣かたしきこよひもや我を待らん宇治の橋姫　読人しらず

此社の評説さまざまにして或は神といひ袖中抄には住吉大明神橋姫の神にかよひ給ふ詠み給ふとぞ 清輔の説には山の神の橋には橋の神の姫とは佐保姫龍田姫のごとし 旧妻なる橋姫になぞらへ 又一条禅閤の御説には離宮の神夜毎に通ひ給ふとて暁毎にさびしく浪の音のたえさせん 玄恵法印の曰む嵯峨天皇の御宇にある女貴船の宮に詣て七夜丑の時参りしてし河瀬に姿を沈め悪鬼と化せしを橋姫といふ 宗祇の説にありとも かくしらん妻なきをもて宇治にまつらん姫なる妻なりよそへてかくちぎる義あり 又源氏物語に橋姫の巻あり 其名をもてこれらをよそへてかかる物語り出て給はぬといへども 本歌の縁語なれども其詮あらず 定家卿も宜ひならん 又逍遥院殿の御説も清輔宗祇のいふ所に同じ 佐保姫龍田姫橋姫是を三姫といふ 源氏口授のありし歌道の師におりそ聞らむべし

続古今 あじろ木にいざよふ浪の音ふけてひとりや寝らん宇治の橋姫　慈円

新古 橋姫のとや錦とこゆるその紅葉はさえこそうちちれ河の波　後宇多院

浮舟渡は橋より弐町ばかり川上にあり 弘安九年興聖菩薩橋供養のため高さ五丈十三重の石塔婆を建る 近年洪水に漂流す

新拾 とふ目やる宇治の河長さしてみれば浮舟もよるべありやと　頼康

鵜飼瀬は浮舟渡より半町ばかり南にあり

うかひ舟あはれとぞみるもののふの八十宇治川の夕やみの空　慈円

槇尾山は橋より南にして北に向ふる山をいふ 土人丸山といふ

新後撰 まききてもたれかはとはん花さかぬ槇のを山れぬ朝霧のそら　雅経

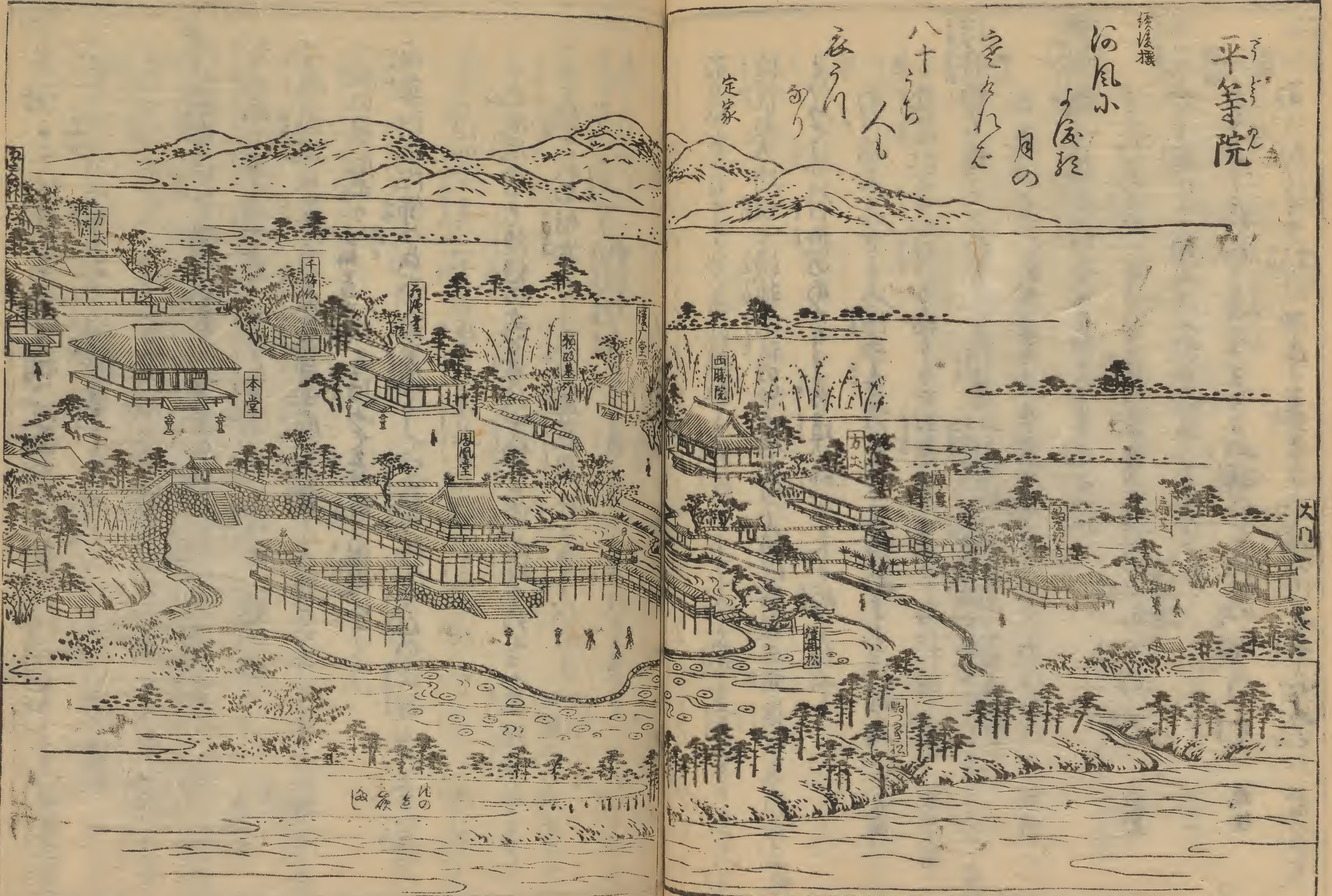
玉葉 あさぼらけ槇の尾山は明そめて宇治の川長よばふなり　土御門内大臣

平等院（びやうどうゐん）

続後撰

河風に よ寒の 月の さえぬれは 八十うち人も 衣うつ なり

定家



平等院は宇治橋の南にあり。初は河原左大臣融公の別荘なりしが、其後陽成院此地に行宮を建られ宇治院と号し、又承平の御門も（朱雀院）此所に遊猟し給へり。李部王記にみえたり。それより六條左大臣雅信公の所領となりしが、長徳四年十月御堂関白公院を得て山荘とし遊覧の地としたまひ、其後子息宇治関白頼通公永承七年に寺となして平等院と号し、法華三昧を修せしむ。（河海抄の大意）

仏殿は鳳凰の象なり。左右の高楼回廊を両翼とし、後背の廊を尾とし、棟の上に雌雄の鳳凰あり（金銅を以て造る）。風に随つて舞ふ。故に鳳凰堂といふ。本尊阿弥陀仏は長一丈六尺の坐像にして定朝の作、堂内の長押に廿五菩薩の像あり。四壁并三方の唐戸に浄土九品の相を画く。絵師の長者為成の筆、上には色紙形ありて観経の文を書く。中納言俊房卿の筆なり。天蓋瓔珞等は七宝を鏤め古代の作物にして美麗荘厳他にすぐべからし。曽て回禄の災なし。（鳳凰堂は永承年中頼通公建立なり）釣殿観音堂は最勝院と号し本尊十一面観音を安置す。南方の寺領なり。

像にして本尊日光不動明王を左右にして脇壇に安置す。此所宇治院の

て殺害せられし扇芝は源三位頼政治承四年五月廿六日此所において自害の所なり（委くは平家物語にあり）。駒繋松（頼政馬をつなぎし所なり）。鐙懸松（頼政鐙をかけし所なり）。阿字池（鳳凰堂のめぐりにあり）。鐘楼（此鐘は龍宮より上りし、園城寺の、本朝三鐘の其一なり）。阿弥陀水（恵心僧都の作り出し）。法華水（橘橋の下にあり）。六字の名号の石塔を建つ。楼門の跡（浄家方丈の西、竹林の内にあり。今のありし楼の跡、焼失の後形を遺す）。

当院は天台浄土の二流ありて、台家は三井寺に属し寺務す（円満院御門主）。浄家は宇治関白の御菩提所として心誉上人より世々浄土宗を以て当院を守る（方丈に頼政の讃ありて及び画像あり）。

金葉　うちわたす平等院のまへたりてうちくのほりそ　ひとへにやまのふもとをうけたまはりて
　　　志賀法師

宇治川の底のしづみにありながらうつしてみゆる山そかなしき

宇治別業　宇治関白頼通公の第宅は平等院のうしろ西の方、方四町にあり。今所の字として池殿、岩橋、御園、御倉町、公文所等の名あり。

続後撰　宇治にて経縁りたる所都の人のすゑかれをみしはかりしる

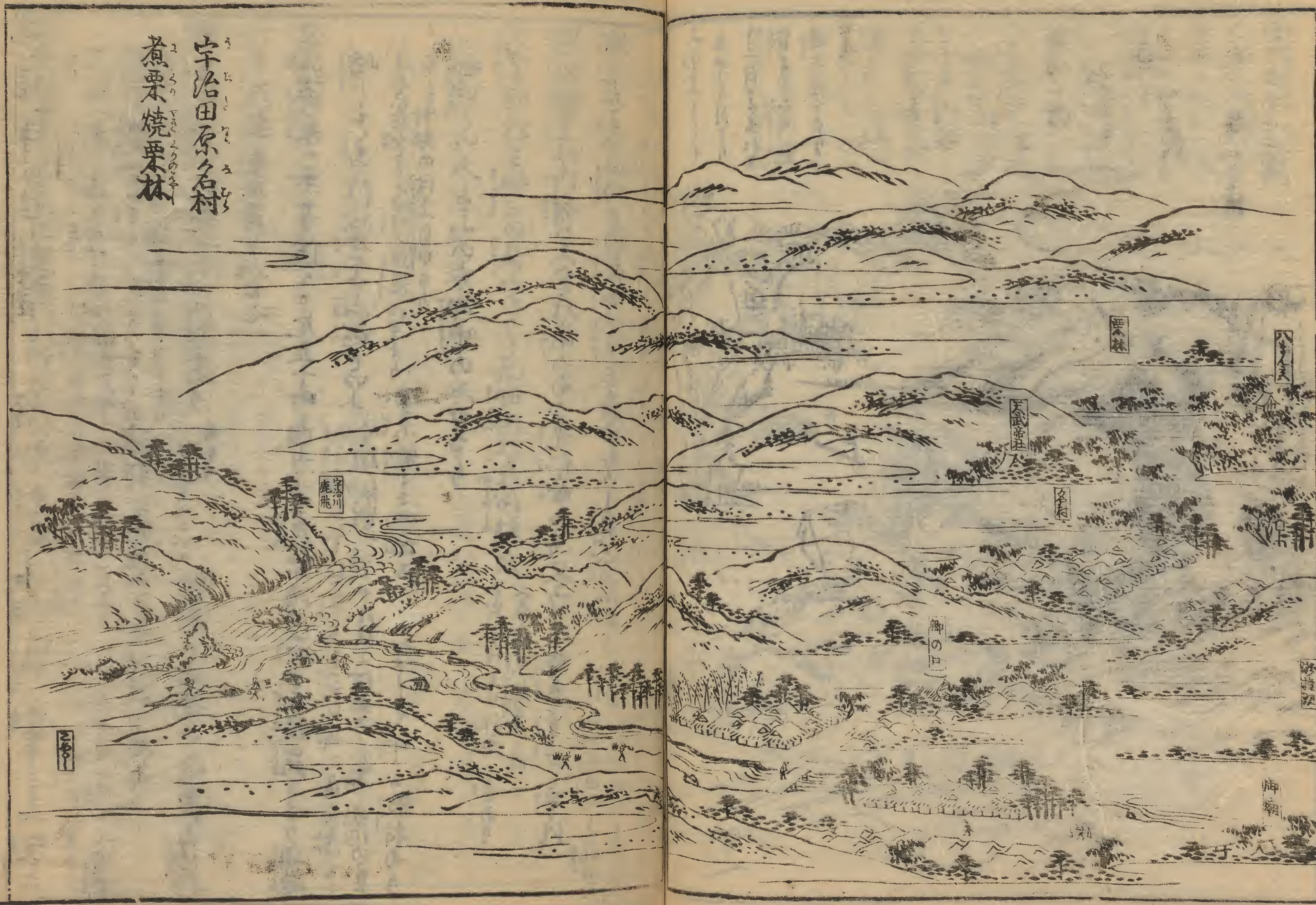
里の名をもみやらきえにたる宮古の人はあとをもるまもせぬ
　　　宇治前関白太政大臣

侍中群要に山城国宇治の御網代より日次に鮎魚を進るとあれバ今も今を盛時の例なくて旅生の江の鮎汲とて平等院より十町ばかり川上槙川のほとりのやうりうて人の叢の肩をならび居て早瀬を堰る名鮎を汲上て興に乗じし太李白の詩に茶戸繁俗を慕をとを試しのことも換るべきぞかし

又氷魚とりて毎年九月より十二月まで之を貢りし花鳥餘情にみえたり

拾遺
数ならぬ身をうぢ川の網代木におほくのひをもすごしつるかな
読人しらず




宇治田原名村
煮栗焼栗林
宇治川
鹿飛
栗林
天武帝社
名村
御の口

縣の社は平等院の後西門の外の傍にあり祭る所は弓削道鏡の霊なりといふ一説には
宇治の悪左府を祭るともいふ　保元物語に曰宇治左大臣頼長卿ハ知足院禅閤殿下の三男なり
信西を師として常に学窓にあり　仁義礼智信を正しくし賞罰
勲功を捌政務おきりとをしかハ上下の
善悪ハおくされたり時の人悪左府とぞ申しける
例祭は五月五日夜神輿一基あり

金色院白山権現は白川村にあり　平等院より十八町南なり　開基は昭澄上人此里の産沙神
とし祭は九月十八日也

宇治田原ハ平等院より凡五十町南にして左ハ宇治川右は山嶽巍々として崛路
嶮しく是より松栗子山越といふ　近江半国をこえて川岸にそふて漸く道ひろく　嶮難なれども今ハ平坦になれり故に往来の人聲々し槙川の辺
まで八舟なりて薪を運送す是より　南より牛馬の往来自由なり　田原郷まで四面みな山にして中に数村あり
郷口といふハ此方郷中の入口なり
大宮明神は郷口の艮にありて此郷内の産沙神なり　祭ハ九月九日神輿一基あり　おまつり所未詳なり
田原親王の御廟ハ大宮の南にあり光仁帝の御父にして施基皇子と号す
猿丸太夫の旧跡は田原郷禅定寺村のひがし奥山田にあり　此地は山洞屈曲して比部乃幽棲なり此ひがしに山城
進にの園池ありて江州戸塚ねハ出るくされと猿丸峠といふ方丈記に栗津のよりをうけく

御栗栖焼栗林ハ田原郷内名村にありむかし浄見原天皇大友皇子を避て吉野へ入給ふ御
居しめし時大友皇子疑ひ給ひて襲す　天皇きこしめして此所にいらせ給ふ
里人怪みてうけひけるとも見えざりける栖に栗を奉りける又煎たるを奉りて上りけれハ天皇
これを得んとて我思ふ事叶ふならバ生出て茂るべしとて所々に埋め給ふ里人
不思議におもひ弥立をく遂に大友王子ハ瀬田の合戦に敗し自害し給ひて是より
よりて吉野王子位に即給ひ天武天皇と称す此栗樹次第に繁茂し凡方四町の栗林
となりこれを御栗栖といふ焼たる如く煎たる如くの栗今に於て当所七不思議の其一也
天皇宝祚を継給ひて今に毎年禁裏へ貢上す　調進の時節ハ公勢より官人来て守護　も禁乱入禁制の高札を林の入口にあり
八幡宮は栗林の東にあり　田原郷中一の宮と号す此宮の天武天皇社　八幡宮の　祭ハ九月廿六日なり　氏神にして祭は九月廿六日なり
信西塚　大道寺村道の傍にあり此所より鷲峰山に至る道なり　少納言信西入道ハ右衛門督信　頼が為に敗北し我館地此里に来りて土中に穴を穿ち自埋すりて竹の筒にて息を通ハ
住り忽ち探出し首を斬都へ上りしに傑えある後に日信西ある世鑽水に面をうつしけれハ
其の首級の人相ありて宿持ありて獄所へ案り切目の玉子の
所前にて相人に行合ふ信西を見て相して曰御身ハ諸道の達人なれ共
まかりて寿命を案のうへにまるぞ相したる
大道寺旧跡も大道寺村にあり　今草堂として観音ならび安置せし　此所鷲峰山の麓なり


鷲峯山金胎寺
空鉢峯
北斗星の拝所
金剛童子社
本堂
多宝塔
西の坊
行者堂
弁天
千手滝
五光滝
原山村
大宮

鷲峯山金胎寺　和束郷内原山村の巓にあり　宇治田原郷口より一里半大道より四十六町あり一町毎に標石あり

天武天皇の御宇白鳳四年九月に役優婆塞はじめて来り大士の霊地なることを見つけ給ひし八ッの嶺は八葉の蓮華に表し釈迦嶽　阿弥陀嶽　弥勒嶽　宝生嶽　阿閦嶽　虚空蔵嶽　不空嶽　妓楽嶽と號し巌頭に坐して修法ましますこと五七日なり是当山の開基也其後元正帝の御宇養老六年に越の白山の行者泰澄法師役君の旧蹤を慕ふて登山し七堂伽藍を造営ありて　後世に及んで荒廃し今法堂纔に存せり

宗旨は真言にして本堂には弥勒仏を本尊とす　行基の作　多宝塔には愛染明王不動を安置す　伏見院の御建立にして行基の作　開山堂　自作役行者像を安置す　傍に前鬼後鬼あり　金剛童子社　当山の鎮守　行宮の旧地虚空蔵嶽にあり　鎮守石　是は日本金柱福満権現　八幡宮　金剛童子を勧請す　空鉢峯　八当山の絶頂なり宝篋印塔を建る是北斗星の降る所なり泰澄法師此所に於て修法の時石上に坐しまします虚空に鉢を投げうち其鉢雲中に飛旋して米穀を入て来る帰る泰澄入寂の後鉢は此地に埋て空鉢峰といふ　世の変ある毎に此所鳴動することありとぞ

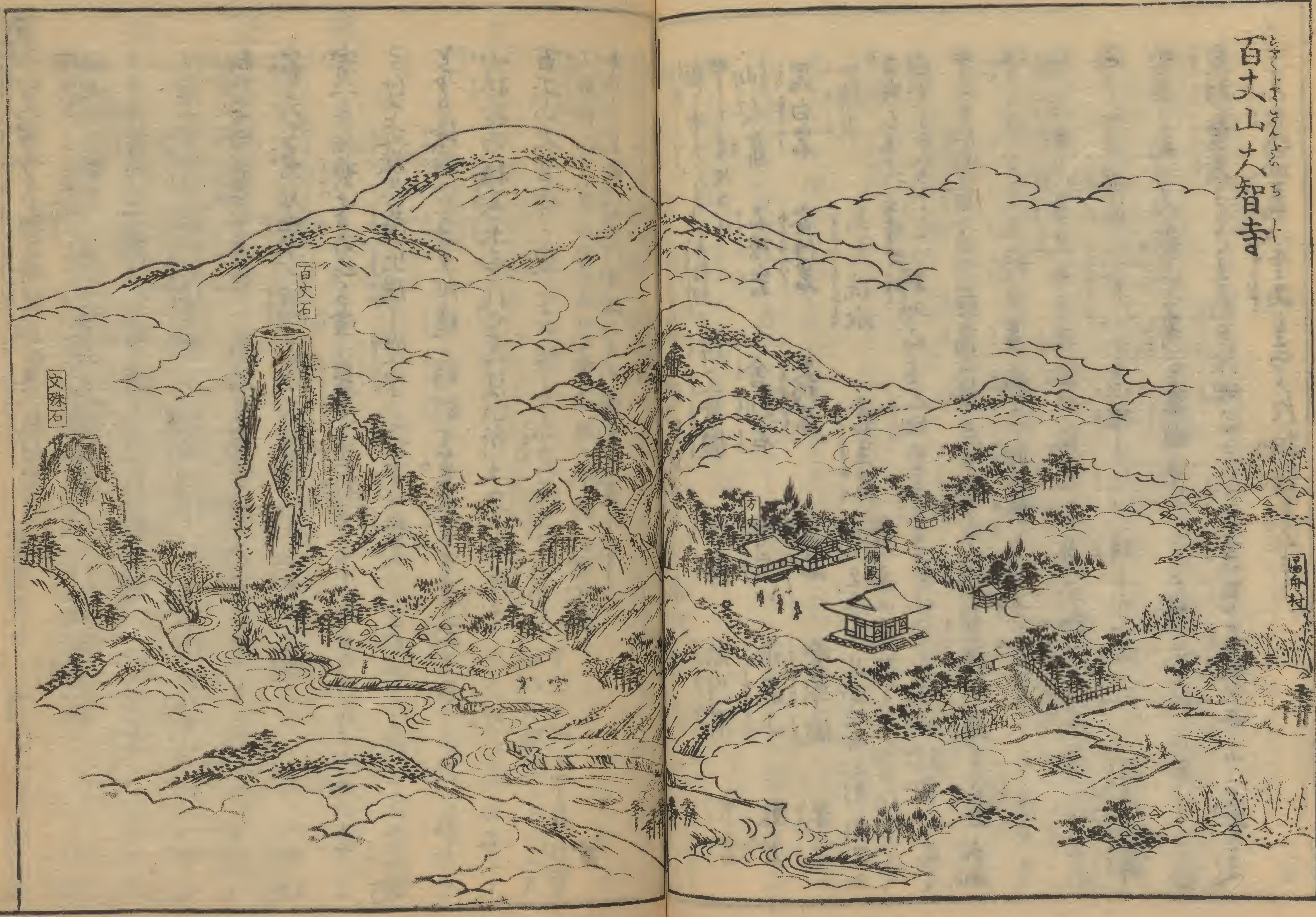
当山東の山腹に役行者泰澄の二師密法修行の霊嶽あり　和州金峯山に準じて当山の行場とよぶ　俗にこれを此多輪東覗　行道石　千手瀧　一の瀧を五光瀧二の瀧といふ　巌を傳ふて登る　旭に映じて光あり　降三世瀧　鐘懸　胎内潜　登岩

仙人窟　石塔岩　舎利石　仏岩　水晶山　熊倉

黒白岩　安住岩　天狗岩　亀石　兜率瀧　老瀧

加持水　馬足洗水　赤生芝　元弘元年九月後醍醐天皇笠置の城没落の御時此所まで遁れさせ給ひ歩煩ひ給ひしと伝へて

梢山といふは山城の高山にして北の方は帝畿の遠景にして中にも比叡愛宕の山嶺高く聳え右手の方には琵琶湖の漫々たる水面雲に連なり三上鏡の翠巒は旭に鮮なり弓手の方には志賀生駒金剛山葛天にして西海の海原兵庫の洲崎淡路の島山見えあるいは摩耶六甲山の高根も此山嶺より一眼の中に遮りて雙眸の客となりぬ衆山に秀て巌頭嶮々として樵夫も絶て歩しつる老杉繁茂して白日を埋んで閑し李白が天姥の吟に五嶽を走し天台の四萬八千丈もまさんと相対すべし



百丈山大智寺

百丈山大智寺は和束郷湯舟村の奥小杉村にあり　鷲峰山のうしろの郷口より山田村撒濟村に至る　これは四里余なり　黒谷のほとりより出誕
禪宗にして江州山上永源寺に屬す　開山大觀禪師諱は理有字は大有奥州金家のつみより出誕
あり不言にして六載にして始て語て曰われは是良辨之父母なりと
ともにきたり諸の知識に謁して經論を暁し壯年の時近江甲賀に住し常に
和州安倍文殊を尊信し參詣の志願を企て湯舟村を過るとき柚木の翁君の
家に入て茶を喫して憩ふ　翁がいはく此ひがしの白當山に山水の佳境ありと告る　師則栢
實一つを推乃てかの山に登り巖上に坐禪をなす　一千日なりける時側の巖二つに
さけて文殊菩薩出現し空中に在ること暫にしてさる　師大に歡喜して石頭
をとり猿排のさらに通に蒔ければ芽を生じて數千本となり林となる今
小杉村の栢本木これなり　其後此所に一宇を建立して文殊の像を安し
百丈山大智寺と號す　本願は山名伯耆守なり　開山は明徳二年十二月十六日化す四十歳　勅諡を
大觀禪師と賜ふ　第二世は大授禪師にして中興　如雪文巖
和尚は東福門院の御歸依ありて佛殿再建し給ふ
佛殿の本尊釋迦佛は安阿弥の作なり　方丈には文殊の像あり又後水尾院の御宸筆

坐禪石　方丈の後ろ十町許にあり　高さ三十間横幅二十間頂上の平方十間なり　岩傍より此所に至る道あり　大觀禪師千日坐禪し給ふ所とぞ
文殊岩　岩面劈われて文殊大師あらはれ給ふ所なり
布引石　岩面白色にして布を引し如くなり
太鼓岩　うてば太鼓に似たり

久世鷺坂　宇治田原の西此所をいふにして大和街道にして久世村にあり　廣野新田の南にあり

續古

白鳥の鷺坂山の松かげにやどりてゆかな夜も更にけり　人麿

家集　躑躅をよめる

今日ぞみるはや坂山の向ふにて佐保姫深くおもしらん　源三位頼政

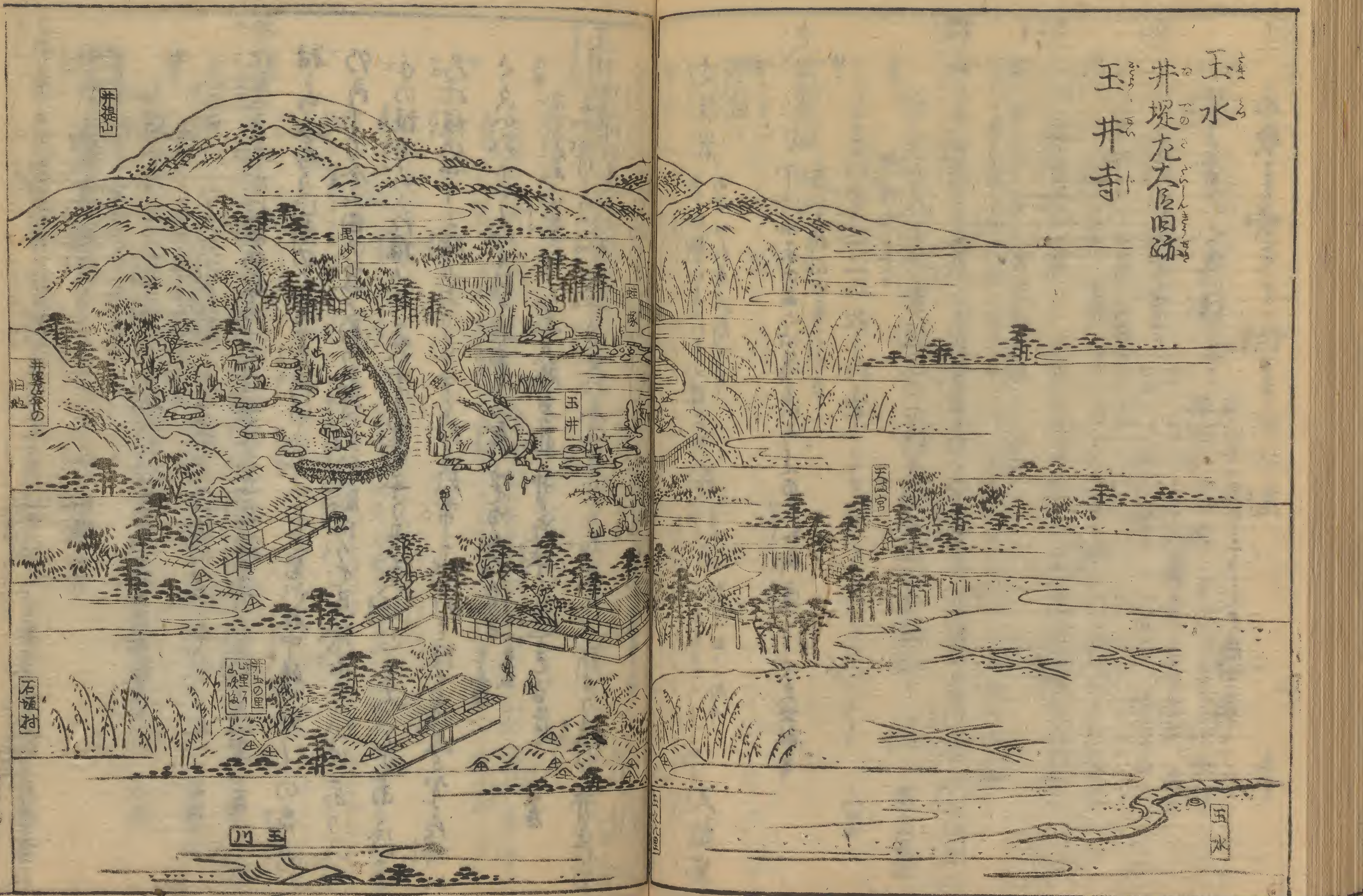
椎尾山光明寺は長池の南觀音寺村にあり本尊は十一面觀世音行基大士の作也　此寺を觀音堂と稱す故におのづから此寺名となる　道の辺にあり其所を椎尾山といふ　此辺より宇治田原に越る

曲れ社は觀音堂の南にして東の山本にあり祭る所は高倉宮以仁親王なり　宇治にて合戰ありし時敗北して曲りの辺にて村人ひそかに家に納し所あり故に社殿を造り此所の産神とし祭は九月三日なり

玉水里は長池の南一里余なり　此所大和街道の驛にして人家多し　秀吉公のときこれを通りし　古の道は東にして井堤里を通りし

玉水井は玉水里の北道に傍にあり　橘諸兄公の愛し玉ふ水の井は井堤の里玉水の　水の此井は里の名によりて後世に準へつるとぞ

山吹も咲つて蛙も水の底　鬼貫


玉水
井堤左大臣旧跡
玉井寺
井堤山
毘沙門
蛙塚
玉井
井堤左大臣の旧跡
石垣村
玉川
玉水

玉井寺は井堤里の中水無村にあり宗旨は真言律にて本尊は聖観音の立像也

開基は豊音阿闍梨なり庭中に玉井蛙塚あり

伊勢物語

むかし男ちぎれることあやまれる人に

山城の井手の玉水手にむすびたのみしかひもなき世なりけり

新古今

延喜十三年亭子院歌合に

足曳の山ぶきの花ちりにけり井手のかはづは今やなくらん　興風

井堤里は玉水の宿の東なり井堤左大臣橘諸兄公の別業を此里の南に石垣村といふあり此所の西の上村の山中にあり岩は松中に隠れむかしの泉なれはみして今は田の字となりぬ昔江の藤ありて其張苗今此地にあり又井手の蛙をかはづと唱りて色は少し黒くやうやう形は少し大きくあらばよの常の蛙の声には踊りありくするも候ぞ常は水にすむを候て夜更るほどに鳴つれさらにいみじう心も清て物哀なる聲にて鳴りける　無名抄　意取

後撰

かくれぬに忍びわびぬる我身かな井手のかはづとなりやしなまし　忠房

玉川　一名井堤川といふ水上は井堤里の東二里ばかり和束といふ所より流れて井手の里　六玉川の其一なり

坂を過ぎ玉水里の西へながれて木津川に落る今も左大臣の山吹を愛しあひて玉川の汀に多く植させ給ひしより（今其跡なし　御溝水にはあり）花の陰は小さき也れ大にはあらずて家にもめでけりて花の盛には黄金の堤なりけるとぞ覚えはなりて他所に異なれて侍りし也　無名抄　意取

古今

山吹はあやなくさきそ花見んと植けん君がこよひこなくに

延五抄曰此歌は橘諸兄の大臣常に山城の井手の寺光明寺を建立して山水に数多植られけり其時高向の迦留丸此山吹を来てよみて奉るとぞ今此井堤の玉水其面影ありとぞ云云

同

かはづなく井手の山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを

これ古今集にはよみ人しらずとあるを清友は橘諸兄公の男なり色葉集曰井堤の山吹と云は橘諸兄井堤寺を造りて金堂四面の回廊のめぐりに廣くとりいて廊のこなたに水を堰て山吹をうゑさせたまひけるとかや其後此寺も荒廃して身はかりなくなれども山吹はなほのこりて家の後つたはれり又雑清抄曰諸兄公の宣ふは我一ぶの後はかれなばあらじといひて見せんとぞ

新古

駒とめて猶水かはん山吹の花の露そふ井手の玉川　俊成

続古

玉川のきしの山吹影見えて色なる波に蛙なくなり　後鳥羽院

新勅

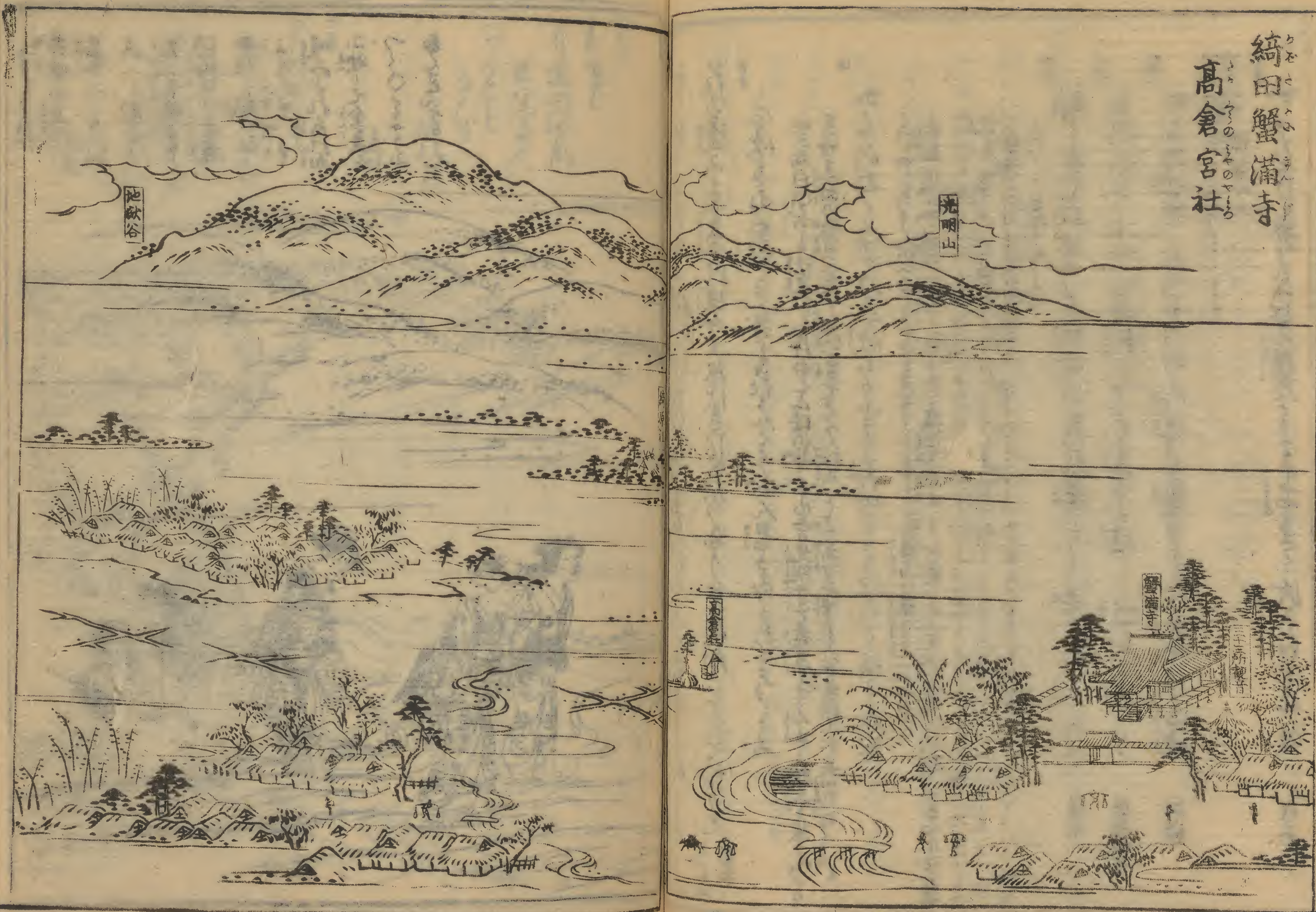
かはづ鳴井手の小川の水清み底にぞうつる岸の山吹　師頼

夫木集

岩橋　むかし玉川にありける橋の跡といふ

いつしかひとし井手の岩橋たえするまで雨もさゝげる山吹　俊季

綺田蟹蒲寺
高倉宮社



井堤の玉川ハ
名所六ツ玉川の
其一ツなり
左大臣諸兄公
此河辺に荼蘼
を植給ひし
より八重一重
咲みだれたる面
に映じて金盞を
つらねたるに
あんてハなかりしと

拾玉集

款冬を
井堤の河風
吹ためて
ちらしそよ
よしひく
山吹の花

慈鎮

玉葉

いとれかし
井手の下帯
結めくり
あふせうれしき
玉河のみ

俊成



高倉宮霊廟 玉水の南鳥居村の東にあり後白川院第二の皇子茂仁親王治承四年五月高倉に御殿ありし故高倉宮とも称す 平家物語曰宮ハ南都へ落させ給ふ三位入道頼政甲四五百騎轡を合せて追ひけるに宮ハ三十騎ばかりにて落させ給ひけるが光明山の鳥居の前にて追つきたてまつり雨のふるやうに射奉りければ何れが矢とはしらず宮の左の御側腹に矢一すぢ立ければ御馬より落させ給ひて御頸とられさせ給ひけり云々

光明山寺旧跡 鳥居村の南綺田の地獄谷にありしといふ 綺田の北にあり

普門山蟹満寺ハ綺田村にあり真言宗にして本尊ハ釈迦仏を安置す 紫銅坐像長八尺 当寺の伝記に曰むかし此郷人常に至善にして仏をしんずる年老ありけり女子一人をもちたり幼少より普門品を誦して慈悲ふかし一日田面に遊びけるが村人蟹をとりて殺さんとしけるを乞ひとり放ちける其父耕せんとて出けるが蛇の蟇を呑てありけるを見て放さんとすれども放さざりければ蛇にむかひ我女子を汝にあたへん其蟇を放ちやれといへば蛇頭をあげて呑かけたる蟇を吐出し藪の中へ這入ぬ翁家に帰て悔しく思ひけるも甲斐なし其夜初更の比衣冠の人入来り今朝の約束によりて来りしといふいかにも浅間敷思ひて何ともすべきやうなく今より三日を経て来りなばといひければ帰りぬ女これをきゝて一つの室をこしらへ閉て普門品を誦して隠れ居けるが約の夜衣冠の人三日を経て来りけるが女の隠れたる室を巡り尾を以て戸をたゝきける父母是をきゝて大に恐るゝ夜半ばかりに至りて百千の蟹群り来り此地に散々に蛇を斬く蟹をも殺されぬ女ハ室内にて通夜普門品を誦して居ありし時に御長一尺余の観音現じ給ひて汝怖るゝ事なかれ常に擁護せしと宣ふ父母悦び種々此女に至て則ち寺を営み蛇を埋て其地に寺を営み冥福を薦む蟹満寺とぞ号しける 一名紙幡寺ともいふ

梶原社 綺田村の南にあり此所梶原平三景時が霊なりと云説あるを延喜式の綺原の社是なりと本名所に健伊那太比賣神又此里の氏神とぞ祭る九月三日

涌の杜 林中森々たり 此社大木多くありて涌出社と号す所和伎坐天乃夫支賣神なり一説に一夜に涌出せしゆへともいふ故に名としたり此里の産土神なり祭は九月十八日

北吉野神童寺と號す 又金剛蔵院といふ 綺田の北にあり山中にあり此所伊別上郷の往還路なり 真言宗にして神童寺と號るは本尊ハ蔵王権現立像長八尺ばかり当山伝記に曰金精明神神童と現じ役行者と共にこれを尊像及開山堂にハ役行者の像を安ず並に四十二丈の御附岡に化の由也 子守勝手の両社 金精明神の社ハ本堂の東二町にあり此境に不図神拝すといふ 称し此山ハ昔和州吉野山より毒地多く登山の人を悩ん故に笠置山より峯を当山吉野山に准して参詣せしとぞ 当所の人家ハ多くむかしの僧坊の跡なり 今ハ坊舎の名あり 例祭ハ二月十一日也

北吉野（きたよしの）神童寺（じんどうじ）




薪 酬恩庵
天神森
天神宮
六坊
六坊
天神宮
方丈
八幡宮
仏殿
昭堂
奥社

妙勝禅寺は木津川の西薪村にあり 酬恩庵と号す 禅宗にして開基は大應國師 正應年中に創し 又一休和尚康正の比に再興す 佛殿に安ずる所は釈迦佛を安置し 開山堂には大應國師の像を安置し 方丈には一休和尚の木像を安ず 在世の時自らのみそれたる鬚髪を生身に植ゑたり

酬恩庵の額は方丈に掲ぐ 一休の筆也 一休の塔あり 遺骨を蔵む 又常に携へ給ひし竹杖あり

方丈の庭は佐川田喜六が好む所なり 八幡宮は當寺の西一町ばかりにあり 此所の地主神也 佐川田喜六の旧跡あり 又儒者此人の古墳あり

天神宮 天神社の西の端にあり 天神社なり 延喜式に出たる主人

神南備山 薪村の西にあり 峯に天神社 水晶石あり

天神杜 薪村の南に隣る

天は天神よりの此里の産沙神 普賢寺溪 天神の杜の巽の方へ出る所あり 祭は九月十一日

綴喜郡 普賢寺溪の巽にあり 方二町ばかりにして南に山あり むかし継體天皇の皇居 筒城に遷されし所とぞ 今都谷といふ山里原 和名に綴喜

夫木
去年も花のさかりに神まつる 携はくれの山乃下道　後鳥羽院

續古
長月のはじめの杜にまうでしは あまりさえたる霜のふる式　行家

新拾遺
やのそまこつゞきの里に(?)きく 白露の……　爲世

段々良不動堂 都谷の山上にあり 弘法大師の作也

大御堂 多賀村の西にあり 本尊十一面觀音 寺号は普賢寺といふ 七堂伽藍厳麗なりし 阿弥陀佛は春日の作

牛頭天王社 普賢寺谷の山上にあり 此里の産沙神 祭祀は八月十八日

若王寺 下狛にあり 若王寺社 本堂の前にあり

藏園山 若王寺の西にあり

祝園 下狛の南にあり 神武天皇の御時 逆臣長髄彦を亡し給ふ所なり

土師 祝園の南にあり 此里 和泉郷の二里半 の社の

木津川 一名泉川とも和泉川ともいふ 河海抄曰泉川とは木津川をいふ 八宝抄にも 水上は和束より流れて来る 木津川は泉川ともいふ 古来より両義を論ず 伊賀国山田郡阿知といふ所より出 伊賀粉王の水 此川を流れ 木津川に来る 雨ふりて晴天の日にても東風つよく吹けば満水して岸を浸す 白砂常に流れて川の面を白布を敷くがごとし

玉
月影の夜のよはる泉河 川風涼しあゆのまつ浴　後鳥羽院

新
泉河きよき流れの里の秋 霧をへだてて鳴子の網　後宇多院

新續古
雁はさまよへ夜をさむみ 川風寒き鳴る夜の浦のはてなき鳥の声　前宮内大輔

木津の渡口 京師より大和街道なり 此所に橋あり 天平十二年 木津里 聖武帝の御宇南都大佛殿建立の時 諸国より材木を運送し此里に着しける 木津の名 此所より起る 奈良へ一里半 人家多し 布を曝して産業とす

現存六帖
夜をちかく泉の里によしある山城の泉の里にかへる川なり　従一位良教

和泉式部墓 木津町の東にあり 式部此里より出しとぞ

橋柱寺 木津の内大谷村の東にあり 泉川の橋断絶の後 橋柱を水底に結ひて数百歳を経たり 後橋柱寺と号す

泉式上人 木津川にて佛像を拾ひ安置し 寛堂

今大智寺と号し 寛永の再興なり 大智寺の南に中将重衡 此所にて誅せられ所に 儀に重衡の塔あり

頸洗池 あかれ堂の良堤の下にあり 重衡が頸を洗ひし所なり


かいじうせんじ
海修山寺
本堂
薬師堂
奥院
加茂社

相楽里は木津の埋土師の南にあり　古事記曰ある佛神醜陋の白土を常に悲て山代國相楽に至り樹の枝に取かゝりて死す故に昔は懸木郡といひしを今改て相楽といふとかや

万葉　朝霧たつかのめりしけく山城のおふの山もまの隈をりるあれく　高橋朝臣

鹿背山は木津の東にあり　山上に城跡あり是は木津の城といふ

馬咋山　仙覚万葉抄に泉川にあらびく山といへり今いふらふ山也

後撰　益雄が小坂の名を行絶く雪降にくらこ故この鹿背山　公實

一の坂　木津の南半里にあり是山城大和の国境也

念佛石　一の坂の南にあり上人土講座とて南都大佛殿再建の時法然上人の導師にて堂供養ありし時此所にて説法し念佛の功徳をとかれし石なり

狛里　上狛は木津川を隔て北十町ばかりにあり下狛は此所より乾にあたつて木津川の北に続けり　西北より所の名とせり一説に百濟馬羅より恵氏恵宗といふ人の僧為りて此里に住せしと高麗の文字を狛と訓る人て所の名とせり一説に百濟の帆と一家に依る偏に狛と呼しむかしを

拾　葛ふきくらゆの流れの爪欲りを腹りかく昔りあるもの　朝光

泉橋寺　此里の南にあり本尊地蔵菩薩は忠心の作也門外に高麗寺の旧跡　上狛の東にあり

やゆかもかつとしもつんをも山城は狛野に咲るそでしら花　兼慶

野中に礎遺れり昔の泉川の水流入てにたかう今は出るとてそを誂ふ也　行基の作長平記に古津の石地蔵といふもの是なり

勅にして唐僧恵弁法師住し寺なり　用明帝の

祝原　狛里の東一里にあり昔の祝を埋る所なり

新古今　みのれ所にからてぞ中ふ多村あり西村川東園部井上尾東村登大路佛生寺奥畑等なり

みのれ所にらんそ流りかいりくえめひらんてら恋しらるらん　兼輔

ま　こゝまれ花さくや伏見れうこのちはろ川の流りも今さうりこえ　光俊

柞の杜　祝原の郷中西村にあり　西の山　柞の森といふ

鶯の瀧　西村の入口にあり

夜の瀧　同所にあり

真田川　西村茶店のもとにあり

後撰　ちくそ山桜れあらし丸風をいとみふる玄れ葉を吹さらそ集経　貫之

後拾　いかあれども柞の杜の落くるらん　源順左大臣

新古　時ゆのあ浪さ人念ふら川　柞のめりにあらしす吹くらし　定家

國分寺　同郷河原村にあり本尊は阿弥陀佛　聖武帝の勅願にて開基は行基なりそも日本國毎に寺を建て国分寺と号す

菜切石　同郷井平尾村にあり弘法大師野草を切り給ひしとあり

海住山寺　祝原郷佛生寺村の山上にあり　坂路八町あり又登大路よりも登る道あり　当寺は聖武天皇の勅願所にして中興を解脱上人といふ又解脱の上足慈心上人も常に住せしとかや　宗は真言にして本尊を十一面観音脇士は地蔵毘沙門を安置す　三重塔　招提寺の開祖鑑真和尚漢土より将来して聖武帝に献ずる佛舎利を

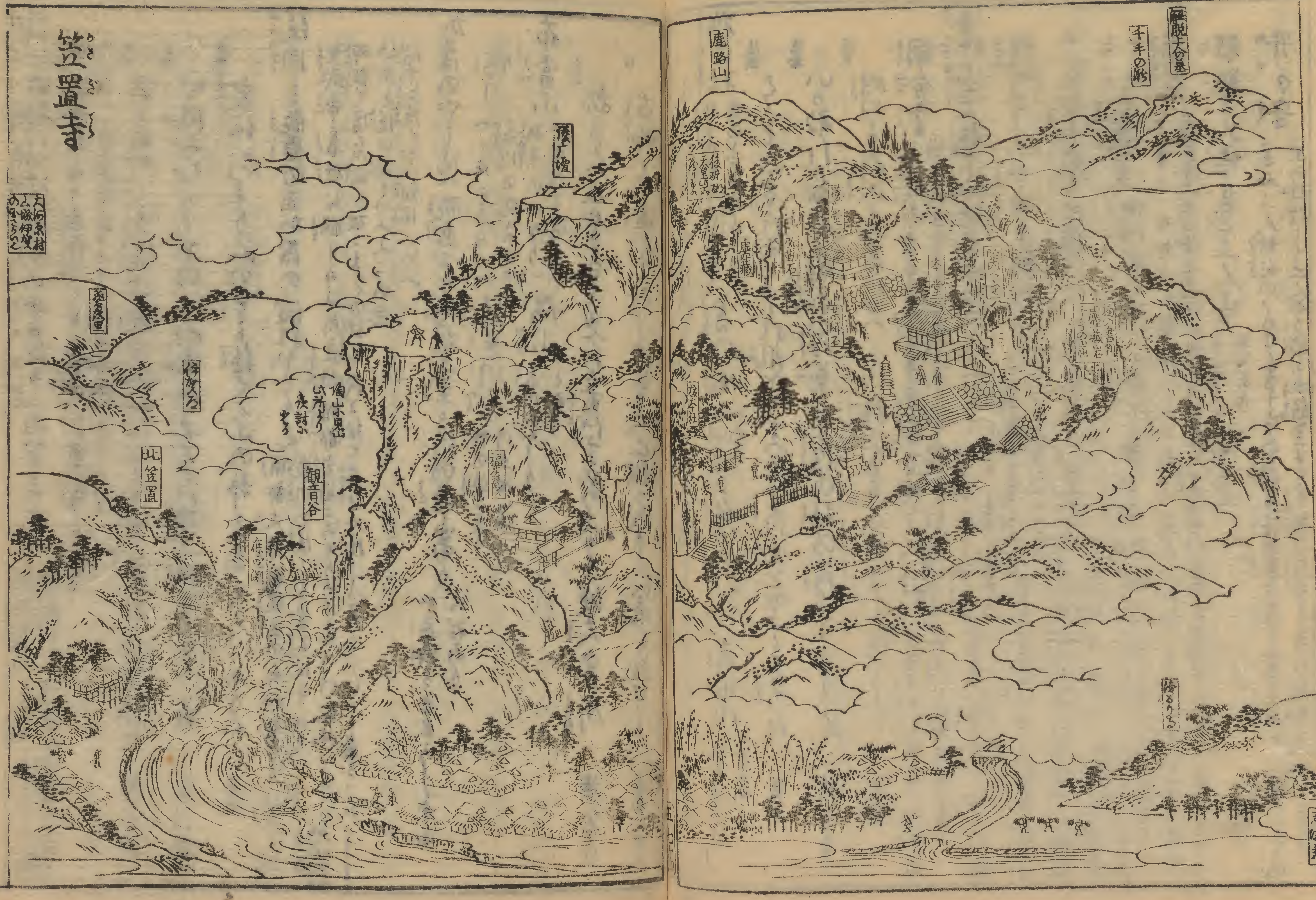
奉納す　文殊堂　本尊は文殊菩薩なり　役行者の像を安置す　影向松

奥院　本尊十一面観音は解脱上人の作なり左右に解脱上人の像慈心上人の像

安置す又南の壁に月輪の窓あり此所より春日明神影向し解脱上人に謁しあつてとあり

解脱上人塔慈心上人塔　本堂より一町ばかり西にあり

井手守　慈心上人耕作の為井手を十六人撰で卑賤の慈悲を持ぬ今は其流れ今は絶にけり　里に住持し十六人あり常に水筋を守ては早魃の難を除しむ是を井手守と号す



笠置寺
北笠置
観音谷
鹿路山
千手の瀧
本堂
弥勒石
虚空蔵
薬師石

恭仁の都の旧地ハ瓶原の西鹿背山のかたほとりなり 聖武帝の御宇天平十二年十二月橘諸兄公此地を経画せしめ其後
始て宮城を造り帝行幸しぬ人賀世山の西の道より東を
左京とし西を右京とせしよし續日本紀にみえたり

新勅
みかのはら久迩の都はあれにけり大宮人のうつりいぬれば　讀人しらず

新拾
吹風にむかしをのこや思ふらん久迩の都にのこるさくら花　土御門院

新續古今
泉河いつより人のたえてくにの都もあれてしめらん　兼氏

流岡 瓶原の西加茂の渡れのほとりにあり 南都大佛殿建立の時伊賀より材木を組て泉川と流さるゝに岩石波中にありて通る事あたはず
聖武帝宸襟を悩しめ給ふ所良辨僧都岩のほとりにありて千手の法を修しめ給へば忽岩石
砕散て道を開く故に多くの材木筏に組て安々と流し下る事を得たり是より巌を
流所と流の岡といふ又一つの岩
此下に流て今ハ飯岡といふ

加茂のやしろハ瓶原より鴨村に至る道の傍にあり 加茂郷を東名として中に古村あり

鴨川 やしろの東を行ハ清見川原 鴨の渡に至る 川東を行ハ
泉川の別名なり

布當山 瓶原の西にあり一隅山とあり
かせ山に隣る 泉川のほとり

萬葉
布當山山なみ見れば百代にもかはるべからぬ大宮所　讀人しらず

日
古郷ハ遠くもあらじ一重山越るかからに念ぞ我せし　高岡河内連

鹿路山笠置寺ハ木津川の河上笠置の山上にあり 麓に民家多し川を隔て両村あり 南笠置北笠置といふ

夫木
五月雨は[illegible]川[illegible]山もさそはれにけり　後[illegible]

當山を笠置と號るゆへハ往昔天武天皇此山に遊猟しめ給ふに[illegible]駿馬巖に臨みて動かず天皇危急にして三寶を禮し安泰を得させ給はゞ此山に佛閣を造営すべしと祈誓しめ給ふ既に感應ありて駿馬速かに進む故に其證として着御の御笠を爰に遺し還幸しめ給ふ遂に佛閣を建立ありて笠置寺と號しめ給ひぬ 麓より坂路八町あり

本堂には弥勒佛を本尊とす 自然石に刻む 宗旨ハ真言にて新義也

護摩堂 是を正月堂と号けて二月には春三日月の間天下安全の修法あり 二月堂

三月堂あり當山回禄の後ハ南都東大寺に移して二月三月の修法あり

弥勒石 天武帝此山をひらき給ひし時天人天降りて弥勒の像を彫む 高さ六間横四間ばかり回禄の時石面焦て佛像消てみえず

薬師石 高サ十間余 横五間余ばかりなり 文殊石 高五間余 横四間ばかり 虚空蔵石 高サ八間ばかり石面に佛像鮮なり

千手崖 良辨僧都ここに籠て行法 胎内挑 奥の院さしわたり身を縮く

楠書判石 一のへ所なり笠置崖といふ 楠正成石面に書判を居ゑおきしなり 護摩壇跡 良辨此所において祈祷ありし也 貝吹岩

護广修法の加持の為 榎本神 當山の鎮守也 鐘樓 解脱上人冥土より閻浮檀金を取歸てこれを交て鑄立しものなり
銘に曰笠置山般若臺建久七年丙辰八月十五日 般若臺 上人と春日明神と對面の所なり 解脱上人塔 向ふの山にあり
大和尚南無阿弥陀佛
東八町ばかり東にあり溪坂陽て 千手瀧 石正童子瀧 金剛童子瀧 此山の奥にあり 溪川の流れなり 後醍醐帝の皇居も當山の嶺にして本丸二の丸の跡は薬師石弥勒石の上の平地なり 楠正成もここに來て始て御味方となりし陶山小見山ら夜討せし所も此山の背にして北の方にあたれり 數百丈の巖石そびえて鳥も翔がたく古松枝をたれ蒼苔露をあらはし麓には泉川を帶て白浪巖を碎く勢ありて水流の委曲鶩蛇に似たり 山別當一の勝地にして千巖秀を競ひ萬壑流を爭ふ 山水の奥といひつべし
栗栖天神宮 笠置山の麓人家の西にあり祭る所は天滿天神也 笠置寺の守護神とし此所の氏神にして祭禮は九月二日也
飛鳥路 笠置の小十余町にあり陶山小見山此山より夜討せしなど今に至て笠置の里に語りつたふ 有市 飛鳥路の北にあり又南方は泉川の岸にあり
大河原 有市の西にあり此所山城大和伊賀三國の堺なり

三都 發行 書肆

江戸日本橋南壹丁目	須原屋茂兵衛
同 淺草茅町二丁目	同 伊八
同 日本橋通二丁目	山城屋佐兵衛
同 中橋廣小路町	西宮彌兵衛
同 芝神明前	岡田屋嘉七
同 下谷池端仲町	岡村庄助
同 本銀町二丁目	永樂屋東四郎
同 十軒店	英大助
京都三條通御幸町角	吉野屋仁兵衛
尾州名古屋本町通	菱屋藤兵衛
大阪心齋橋通北久太郎町	河内屋喜兵衛
同 仝通本町北エ入	同 和助
同 仝通備後町南エ入	同 卯助